

8 明治時代

明治になっても江戸時代と同様、南八代村、北八代村に分かれたままでした。合併して八代村になるのは明治十四年か十五年のことです。はっきりした記録がないので、このようにしか言えません。だが明治四年の廃藩置県以後は、だんだん一つにまとめるような政治のしくみになっていきます。ですから説明は江戸時代のように南北二つの村に分けないで、八代一つにまとめておきました。ただし年表は十五年までは、南北二つの村に分けて書いています。

姫路開城 慶応四年（九月八日、明治となる）

一月三日、鳥羽伏見の戦が始まりました。わが姫路の侍は幕府についていりましたが幕府軍が破れ、姫路城主酒井忠惇は徳川慶喜とともに江戸へ、姫路隊は家老高須隼人に率いられて姫路へ帰ってくるという結末になりました。

「幕府に味方した姫路を討て」という命令で、岡山の軍が一月十二日姫路城にせまりました。岡山軍は大砲を景福寺山に運び上げ、また市ノ橋門や清水門などにも大砲

をすえ、十六日の午後、景福寺山の号砲を合図に砲撃しました。大砲の音は、わが八代へも聞こえたはずですが、八代ではその時のようすを語る言い伝えがありません。それというのも、砲撃はほんの数発、それも空砲をまじえてのことだったようですから、のちの語り草にならなかつたのでしょう。城への被害もなかつたのです。

城内では会議して降伏ときめ、侍は縁故をたどって城外へたちのくことにしました。その時の事情は『姫路城史』（橋本政次著）に

鳥羽・伏見の戦

J R 京都駅の南方、名神高速道路京都南インターチェンジのあたりが鳥羽で、伏見はその南東。砲火もまじて戦ったが三日の夜に幕府軍は敗れた。

姫路隊は西方の山崎あたりの渡し場に陣をかまえていた。

トコトンヤレ節

二月十五日、有栖川宮を東征大総督に西郷隆盛を参謀として江戸城攻撃に出発、そのとき鼓笛隊に合わせて歌ったのがこの歌で、軍歌のもとになり、のち流行歌にもなった。

くわしく書いてあります。なにぶん急なこ
となので、城内に住む侍やその家族たち、
商人たちに大混乱が起こったことは想像す
るにあまりありません。この時のパニックを
語るものも八代には残っていないので、野
里村大日（北八代村の東一六六）の話を書い
たものがありますから、それを転載してみ
ましょう。

明治元年正月、鳥羽伏見の戦に姫路藩
主酒井忠惇は徳川慶喜に従った。官軍に
帰順した岡山藩は同月十二日、大兵を以
て姫路城にせまつた。その時のようすも
祖母の話の一つである。

「御維新の時には備前が攻めて来たん
やで。備前が景福寺山に大砲をすえて、
お城めがけてドーンドン撃つた。そりゃ
こわかったで。町の方から「備前が攻め
て来た！」といって荷物を包んでおおよ
い田舎の方へ逃げて来よつた。」

夕方には姫路開城ときまつて藩士はこ
とごとく田舎に退去を命ぜられた。

「うちの家にも侍がとまりに来たんや
で。その侍は御飯を食べたべ、あたいの
おとつあんに

「このたびはいかにも残念なことで御
座る。」

「いかにも残念なことで御座つた。」

と何回も何回も言ひよつた。

（『広嶺中学郷土研究クラブ報告』）

「老婆の昔がたり」より

細井市大夫という侍は悲憤のあまり大日
河原で切腹したことが『姫路城史』に書い
てあります。

あくる十七日の朝から岡山藩の池田章政
は軍隊をひきつれ姫路城に入城しました。
十一代前の先祖の池田輝政が建てた姫路城
へ二百六十年のちに、その子孫が入城する
ことになったのです。

五榜の揭示 鳥羽・伏見の戦が終わると、
官軍は五月におこなわれる江

戸城総攻撃の準備をしますが、西日本では
さわぎもおさまりました。三月十四日、新

一天万乗のみかどに手向いするやつを
トコトヤレ トンヤレナ
ねらいはずさずドンドンうちだす薩長士
トコトヤレ トンヤレナ

宮さん宮さん お馬の前に

ひらひらするのは、なんじやいな
トコトヤレ トンヤレナ

あれは朝敵征伐せよとの

錦の御旗じや、知らないか
トコトヤレ トンヤレナ

伏見 鳥羽 淀 橋本 楠葉の戦いは
トコトヤレ トンヤレナ

薩長士のおほたる手きわじや
ないかいな
トコトヤレ トンヤレナ

（以下略）

橋本は京都府八幡市
楠葉は大阪府枚方市

池田氏

池田輝政の孫の光政は鳥取へ、のち
岡山城主となり、子孫は明治維新ま
で続く。池田章政は、岡山藩の最後
の藩主。

政府は五か条の御誓文を發表して、これからの政治の方針を内外に示します。国民に対しては各村むらに掲げてあつた高札を全部とりはずし、新たに定三札と覚二札を掲げることになりました。定三札とは、いつも掲げておく立札、覚札は新たに出される規則を書いた立札です。

定三札の第一札

一、人タルモノ五倫ノ道ヲ正シクスベキ事

キ事

一、鰥寡孤獨廢失ノモノヲ憫ムベキ事

業アル間敷事

一、人ヲ殺シ家ヲ焼キ財ヲ盗ム等ノ悪

の三か条です。第二札は下の欄に書きま

したが、第三札は

一切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御制禁タリ若不審ナル者有之バ、其筋ノ役所へ可申出、御褒美可被下事

という札です。ところが外国から抗議されたので二か月ほどあとの閏四月四日

一、切支丹宗門之儀ハ是迄御制禁之通

固ク可相守事

一、邪宗門之儀ハ堅ク禁止候事

にかえました。前は「キリスト教は邪教」としてゐるのに対し、あとのものはキリスト教と邪教とを切りはなして少しおだやかな表現にしています。ところがこれでも西洋諸国は承知しません。明治六年二月二十四日とうとう定三札を廃止してしまふのです。北八代に残っている第三札は閏四月に修

五榜 五つの立札。

五倫 君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の間で守るべきこと。

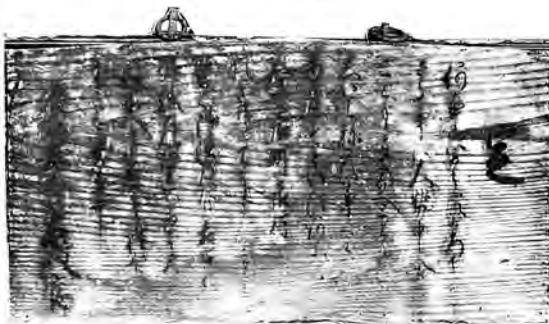
鰥寡 妻をなくした人、夫をなくした人。

第二札

何事ニ由ラス宜シカラザル事ニ大勢申合セ候ヲ徒党ト唱へ、徒党シテ強テ願ヒ事企ルヲ強訴トイヒ、或ハ申合セ居村ヲ立退キ候ヲ逃散ト申ス、堅ク御法度タリ、若右類ノ儀之アラバ、早々其筋ノ役所へ申出ベシ、御褒美下サルベキ事



第一札 広峯神社



第二札 北八代にあつたもの



第三札 同上

正したあとのものです。それなのに写真のものは「慶應四年二月」と書いて、いかにも初めからのものであるかのようにしています。このようなことは北八代村だけのことでなく、全国どこでもあったことのようにです。

大小に分けた小さいほうには

「右の條々朝廷より仰せいだされ候あいだかたく相守るべきものなり」

最後に

「姫路藩知事」

と書いてあります。姫路の最後の殿さん酒井忠邦が版籍奉還はんせきほうかんをして藩知事になったのは明治二年六月のことです。

大小の木札にわけたのは、最後の文がど

れにも通用することなので手間をはぶくために考えたことなのでしょう。北八代村のものだけに見られます。ほんらいは広峯神社のように一枚の板に書くべきものだったのです。

行政区画きぎょうくわの

移り変わり (一) 明治になっても江戸時代

八代村は飾東郡中嶋組しきとうぐん なかじまぐみに属していました。

北八代村の五人組御改帳ごにんごみおらためりょう、宗門御改帳しゅうもんごらためりょうの表紙を見ると、そのことがわかります。

しかし明治三年の五人組御改帳にはじめ

て「姫路藩」という文字が出てきます。二年までのものはみな「姫路領」なのに、藩

と正式にいいだしたのはこの年からである

明治二年

姫路領

北八代村五人組御改帳

尾東宛

八月

明治三年

姫路藩

北八代村五人組御改帳

御支配

八月

北八代村五人組御改帳

(上) 明治2年 (下) 明治3年
のもので最後のもの。「姫路藩」
「御支配」という書きかたに変わっている。

第八小区とは

東市之郷村・中市之郷村・下市之郷村・神屋村・平野村・大野村・南八代村・北八代村・広峯山・伊伝居村・山野井村・東中島村・横手村・西中島村・白国村・野里村・国府寺村の十七か村

明治七年一〇月頃、これまでの第一

小区(姫路中部)の各町を他の小区に所属がえし、以下順に繰上げて十小区にしたようで、第八小区は第七小区になる。水車水道に付御届(明七、十)に

「第八大区第七小区 南八代村保長田中五平」とある。

明治七年一二月、区に区長、副区長、町村にはそれぞれ戸長をおいた。矢内長十郎(北八代村の人)は戸長だったという伝えがあるが、この頃の戸長なのかも知れない。

地券証御下ヶ渡之義願(明八、四)に

二等戸長 池内仙次郎(南八代村の人)

一等戸長 兎島八尋

と書いてある。実際には、一等・二等といったことがわかる。

こともわかります。

明治四年七月十四日の廃藩置県で姫路藩は姫路県となり、また五人組帳も宗門改帳も以後つくらなくなりました。

明治五年六月播磨にある十六の郡を東から順に番号で呼ぶようになり、明石郡を第一大区、美嚢郡を第二大区、飾東郡は第八大区とし、大区の中を小区に細分して大区には区長を、小区には戸長と副戸長を置きました。

第八大区の中は十一の小区に分けたので私たちの北八代村や南八代村は第八小区に属しました。そうして小区の中にある町や村には保長を置くことになったのです。南北両八代村にも保長があったはずですが、五年頃のその人の名はわかっていません。明治八年七月、第八大区の中を三つの小区にまとめるという編成がえがあり南北両八代村が第一小区の中にはいります。白川小学校の卒業証に押してある印には第一小区の字があらわれています。

明治十二年に県の通達で大小区をやめ郡役所を置くことになりました。大区、小区は人びとになじまなかつたのでしよう、第八大区は昔どおり飾東郡の呼び名にもどりました。そうして各部落ごとに戸長役場を置いたようですが、その時の戸長の名もわかりません。

明治十三年七月、その戸長役場を整理して飾東郡には十四の戸長役場を置きました。

ま と め (I)

- | | | |
|---------|--|--|
| 明治 | | |
| 年月日 | | |
| 3 ころ | 姫路藩とはじめて藩の字を用いる | |
| 4・7・14 | 姫路県になる(廃藩置県により) | |
| 4・11・2 | 播磨全域が姫路県となる(姫路・明石・龍野・赤穂・三日月・山崎・林田・安志・小野の各県を合わせて) | |
| 4・11・9 | 飾磨県と名を変える | |
| 5・6 | 飾東郡を第八大区とする 南北八代村は第八大区第八小区に入る | |
| 7・10ころ | 第八大区第七小区に南北八代村が入る | |
| 8・7 | 第八大区の中を三つの小区に編成がえし、南北八代村が第一小区に入る | |
| 9・8・21 | 兵庫県と飾磨・豊岡・名東各県が合併 | |
| 12 | 大区小区をやめ第八大区は飾東郡の名に返る 18郡役所ができる 各部落に戸長役場を置く | |
| 13・7・1 | 飾東郡内を十四の戸長役場にまとめる 第四戸長役場に南北八代村が入る 各部落に総代を置く | |
| 14・7・1 | 〇〇組戸長役場になる | |
| 14 ~ 15 | 南北八代村が合併して八代村となる | |
| 16・7・1 | 八代組戸長役場ができる(6か村を統轄) | |
| 17・10・1 | 八代村外五ヶ村戸長役場と改称 | |
| 22・4・1 | 城北村誕生 | |



第八大区第一小区の印

明治十年の白川小学校卒業証に押してある印

第八大区
白川校
第一小区

(または二に同じ)

それは

第一戸長役場 姫路五十八か町

第二戸長役場 姫路四十五か町

第三戸長役場 市之郷村・神屋村・その他

第四戸長役場 白国村・広峯山・平野村・

大野村・伊伝居村・北八

代村・南八代村・山野井村

(役場は伊伝居村に置いた)

第五戸長役場 以下略

行政区画の 第四戸長役場の統轄範囲は、

移り変わり (二) 北は白国村から南は山野井

村までの広い範囲だったので、もつと小さ

くしようということになり、翌明治十四年

七月一日から「〇〇組戸長役場」と名も変

えました。一例をあげると

平野村・広峯山・大野村

の三か村で一つの組になりました。

『飾磨郡誌』

しかし、このときの史料がこのほかにない

ので、南北八代村は、どこと組んだのか分

かりません。

けれども、これでは戸長役場の数が多く

なりすぎたというので、十六年七月一日か

ら範囲をひろげ、役場の数をへらします。

私たちのところには「八代組戸長役場」が

できます。役場を八代の東光寺に置いたの

でこの名にしました。その受け持ち範囲は

広峯山・平野村・大野村・伊伝居村・

八代村・山野井村の六か村です。

しかしこの役場の名では、ほかの村々が

八代の支配下にある感じがするというので

十七年十月一日から

八代村外五ヶ村戸長役場

の名にかわりました。この六つの村は以後

そのままのグループで、明治二十二年に城

北村になります。

南・北八代村 南北両八代村が合併して八

の合併 代村になったのはいつか、

ということとは長い間わすれさられていまし

た。昭和二年の『兵庫県飾磨郡誌』には「明

治の初年合して一村となれり」と書いてあ

るので、その時すでにわからなくなってい

戸長の任務

布告の伝達、租税の上納、戸籍、

徴兵、土地、教育などの事務、町村

の事業を行なう。

明治一五年七月当時の

近くの村の戸長

山野井村 田村覚次

新在家村 池内宗太郎

辻井村 上井安太郎

山畑新田 岡田勝三

八代村 池内仙次郎

『山野井村地図』



「兵庫縣飾磨郡 八代村外五ヶ村 戸長役場」の印

たのです。けれどもこの本を作ることに
 して、いろいろ調査した結果、それは明治
 十四、五年だということがわかりました。
 そのわけはこうです。『兵庫県播磨国地種
 便覧』という本があつて、八代の項の見出

しは

北八代村 戸数 十二戸
 人口 七十三人
 △八代村

南八代村 戸数 百三十八戸
 人口 六百九人

△は小学校の分校があることとし
 して、白川小学校が城南小学校の分校
 になっていたので△がつけてある。

まとめ (2) 『兵庫県市町村合併史』

村名	飾磨県 明五・六	兵庫県 明九・九	明二三・七・一	明一四・七・一	明一六・七・一	明一七・一〇・一
広峯山	第八大区第八小区	第八大区第一小区	第四戸長役場	〇〇組戸長役場	八代組戸長役場	八代村外五ヶ村戸長役場
平野	"	"	"	" 『飾磨郡誌』	"	"
大野	"	"	"	"	"	"
伊伝居	"	"	"	"	"	"
北八代	"	"	"	"	"	"
南八代	"	"	"	"	"	"
山野井	"	"	"	"	"	"
白国	"	"	"	"	野里組戸長役場	野里村外三ヶ村戸長役場
横手	"	"	第二戸長役場	"	"	"
東中島	"	"	"	"	"	"
西中島	"	"	"	"	"	"
神屋	"	"	"	"	国府寺組戸長役場	国府寺村外三ヶ村戸長役場

補訂

明七、一〇 第八大区第八小区は第八大区第七小区に変更

明一四、七 伊伝居以下の村は、どの組であつたかわからない

明一五 このころ南北八代村が合併

となつています。ところが、この本の初めのところに「戸数、人口は明治十四年一月御調」と書いてあり、終わりに「明治十五年十二月刊行」と書いてあります。ですから合併は十四年か十五年だということになります。

ところでもうすこしはつきりしたことが分らないだろうか。八代村の南の山野井村の明治十五年七月の地図を見せてもらいました。

それには「八代村戸長 池内仙次郎」と

書いてありました。これで十五年七月には八代村といったことが分かりました。つまり南北八代村の合併は、十四年一月から十五年七月までの間におこなわれたのでした。

白川学校 明治五年、学校をつくるようにと学制が公布されてから日本各地に学校が建ちはじめました。けれども費用がたくさんいることなので、すぐには建ちません。

南八代村には白川学校ができたのですが、



①



②



③

この始まりは、明治六年といい、また八年ともいいます。はつきりした史料が見あたらないからです。

白川学校に関するもっと古くて確かな史料は、写真の卒業証書①です。日付は明治八年七月二十四日。当時の学校は、幼稚課——下等小学八級—七級—六級……一級と半年ごとに進級していきます。幼稚課も半年で卒業しますから、七月より半年まえの一月に、この生徒は入学していたはずですが、だから白川学校は明治八年一月には開校していたことになります。

学校はどこにあったか、これまたはつきり書いてある史料がないのですが、言い伝えなどとも総合すると、今の八代本町一丁目10番の船場川ぞいにあったようです。そういう見えるわけは、そこは江戸中期から姫路藩の御用水車があった所で明治になると官有地になりました。ここに学校をつくれれば費用は安くすみます。

白川学校と名づけたわけは、船場川の対

岸にある有名な白川神社の名にちなんだからです。

学んだ人々
白川学校は他の学校に比べて

北は今の田麿製麵所から南は白川橋まで八十町、東西三十町ほどありました。だが今の小学校の広さとは比べものになりません。

明治八年の「文部省第三年報」には生徒数は男三七〇名、女一〇九名となっていました。合計四七九名、生徒数は今の学校に、

負けません。へこれだけの生徒が、こんなせまい学校で勉強できたのだろうか？ 私たち編集委員は考え込みました。

ところがフスマの下張から当時の生徒の名を書いたものが出てきたのです。それを下欄に書きました。この中にみなさんのヒイジヤンやヒイバアサンの名はないでしょうか。伊伝居、山野井、新在家の人の名もあります。これは下張から偶然見つかったものなので、ほんの一部ですが、これだけでも六九名、四七九はオーバーな記事で

白川学校に学んだ人々

●下等第五級生の一部

早川 つね	石田 駒吉	柴山八千代
宮沢 やす	石原 伝吉	井原 さだ
豊岡 りう	小暮 ふみ	西村 さく
真能まさき		

●下等第六級生の一部

大谷 猪吉	渡辺 みつ	中川 権次
荒木 豊市	池内 元次	大谷しやう
坪田 木一	坪田 竹次	岩田卯三郎
五十嵐悦一郎	木戸 平次	秋山卯之弥
黒崎 たき	矢方 猪吉	出淵 とよ
池内 鉄次		

●下等第七級生の一部

坪田 吉蔵	池内隆之助	矢内 仙吉
小野 しづ	本多 五六	南戸 りき
青木千太郎	矢内 宗吉	田中 勇次
矢内 いは	今内 てい	立川 尺市
坪田繁太郎	曙 とら	阿佐美くに
阿佐美助三郎	内山 品次	武田 信次
山崎 木蔵	田中 いと	長彦 祐勝
中嶋 富蔵	渡辺吉太郎	坪田 つぎ
山本 たけ	坪田 鉄次	池内 たつ
野口猪雄次	坪田 まさ	萩原七之助
有馬 元一	田中 仙吉	片山 七彦
坪田 乳次	中嶋 辰次	上居 源吉
山田 らく	福本しやう	田中 利吉
黒崎 たき	荒木 豊市	荒木 ひさ
佐藤 広弥	池内 鉄二	池内 元一

なかつたと思うようになりました。

だがしかし、四七九名が登校するとなると身うごきも自由にならないほどの校地です。やはり疑問が残ります。それでつぎのことを思いだしました。当時は学校へ行かないで家の仕事の手伝いをする子が多く、巡査が回ってきて登校するよう叱つていたといふのです。四七九名とは在籍者数なので、実際に学校へよく行つたのはこの内の何人かであつたにちがひありません。

学校の費用

白川学校の費用はどれほどだつたか。これまた下張からみつきりました。それは明治九年七月より十二月の費用です。当時の米一俵は一円三十四銭、つまり米百俵余りの値段が半年間の費用だつたのです。

これらの費用は住民が出しました。それを知るのに、これまた貴重な記録が下張にありました。写真はその帳面の表紙で、明治九年の後半分、南八代村のものです。この内容は金額と人名がズラッと書いてあり

ます。見つかったのはほんの一部なので全体のことはわかりませんが、十円二十二銭六厘が最高、二十銭が最低です。これも米に換算すれば、十俵から両手一杯ほどの米といふことになります。「取立簿」と書いてあることからすると、全住民から出したのでしよう。

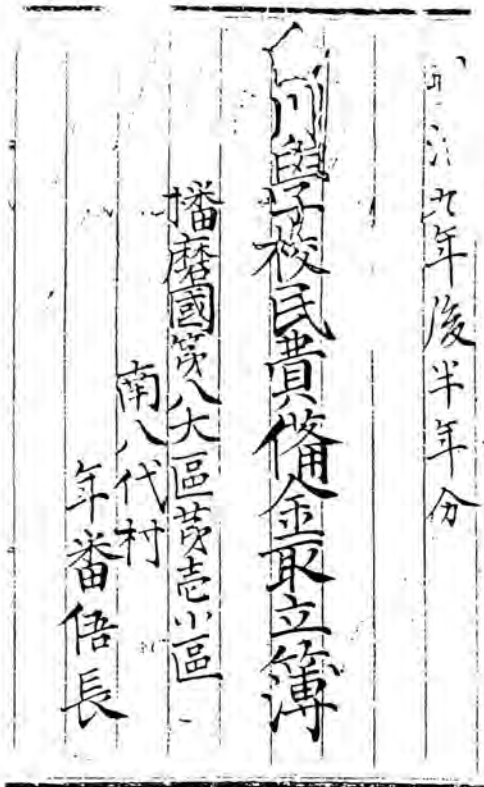
これと同じ帳面が近くの村にもあつたはずですが、まだ見つかつていません。

城南校の 明治十年、制度が変わつて白川小学校と小の字が入るよう

白川学校の経費

明治九年、七月より二月まで

訓導 給料	七八円
雁、助教	三四円
小使給	一二円
書籍器材費	一七円九一銭五厘
薪炭費	八円六五銭六厘
雑費	一〇円九七銭
合計	一六一円五四銭一厘



になります。そのしよこは卒業証書②、
③の写真をみればわかるでしょう。

白川小学校は城南小学校の分校になります。それはいつか？ これもはつきりしないのです。明治十五年発行の『地種便覧』(↓P四)に八代に分校のあるししがしてあることから、そのときまでに分校になっていたことだけがわかります。

ふしぎなことがもう一つあります。次の姫路紡績所が明治十三年この地にできるのです。白川小学校はどうなってしまうのでしょうか。このころ分校になってしまったのでしよう。このころ分校になって小さくなっていたので紡績所を建てられたのでしようか。

131Pで見るとように播陽時計会社が明治二十一年、白川小学校の旧校舎を利用して白川橋の西にできます。すると、このあたりにだけ校舎が残っていたことになりました。

年表で見ると、伝世小学校が明治二十一年伊伝居にできます。こんなことを考え合わせると白川小学校は城南小学校の分校とし

て明治二十年ころまでこの地にあったのだが、まもなく廃校になったのでしよう。

明治二十年十一月五日 第三區學堂 第五番 小學校下等第七級生

姓名	年 齡	讀 書	習 字	算 術	問 答	語 記	書 取	作 文	書 法	幾 何	記 簿	定期試験		均 點 算 出	
												點	定		
	60														
	45									6	8				
	39									6	8				
	38									3	6				
	38									6	8				
	34									4	8				
	34									4	8				
	32									5	4				
	30									6	5				
	30									5	7				
	28									4	6				
	28									4	5				
	27									4	5				
	27									4	5				
	26									4	3				
	26									4	5				
	25									4	5				
	25									4	5				
	20									4	5				
	20									4	5				
	17									4	5				
	17									4	5				

月次試験採点表

上の欄外が欠けているが、他の表から「月次試験採点表」と書いてあったことがわかる。毎月試験して、この表を作った。左端の欄は成績の順位。

教員試験

文部省第三年報によれば、白川学校には五人の先生がいました。

ところが何という人が、どんなにして教員になったのかまったく分かっていません。

だが明治十八年、南八代村の赤鹿佐太郎が教員の志願をしているので、それを見ましよう。三才のときです。

彼は次の願書をだしています。

〔地〕
六三
九



補助員志願書

私儀

本郡内小學校補助員奉勤仕度
御試験之上御採用被成下度奉願也

願也

赤鹿佐太郎

明治二十年二月廿日

赤鹿佐太郎

計右部共計

計右部共計

計右部共計

飾東郡長大野親隆殿

これにたいして次の通知がありました。

小学校補助員志願ニツキ、来ル二十七日ヨリ検定相成候条左記品物携帶、同日午前九時迄ニ出願届出取計ラウベキ旨、本郡役所学務課ヨリ紹介之有リ候間、此ノ段通達ニ及候也

一 筆紙墨
一 算除盤

四月二十五日 八代村戸長役場 印
赤鹿佐太郎 殿

これによつて

1、志願書は戸長役場を通して郡長に出した。

2、試験は郡役所で行つた。

3、筆、紙、ソロバンを持つていくことがわかります。

だが佐太郎は、この試験に合格して先生になったのかどうかは史料がないのでわかりません。

姫路紡績所 この工場は今の八代本町一丁目10番、田麻製麵所の場所につくる

赤鹿佐太郎

嘉永六（一八五三）〜明治二〇（一八八七）寺子屋孝徳舎の先生赤鹿歎貞の孫。
漢学を山野井村の堀良伯や田藩士の大沢泰山に学ぶ。
中西流和算を延末村の田中政信に学ぶ。
明治一五年当時、飾東郡第一番学区学務委員であつた。

明治十三年六月から十七年八月ごろまで操業していました。

姫路は江戸時代、河合寸翁の時から農民たちが織った木綿を買い集め「姫路木綿」として江戸へ送り、藩が大きな利益をあげていました。それは農村に仕事があふえ、農民の生活の助けになっていました。

ところが外国との貿易が始まると、イギリスから安くて品のよい綿織物が輸入され姫路木綿はだんだん売れなくなる、女の人の仕事の機械織りがひまになる、綿作農業もおとろえ農家の生活が苦しくなるという状況でした。

「これではいけない」と、ときの兵庫県権令森岡昌純は明治十年十一月、内務卿大久保利通にこの状況を訴え、綿糸紡績所をつくるための資本金一万円を借りたいとの伺いを出しました。翌十一年三月九日、太政大臣三条実美が承認し、大蔵省へ貸し下げを指令したので、別に県税からの一万五千円とあわせて十二年に工場ができました。綿紡

績工場としては、わが国で四番目、兵庫県でいちばん早くできた工場です。

場所を八代にきめたのは、江戸時代から姫路藩の水車があつた所で(↓88P)明治になると官有地になり、水車をまわす水路も今の八代富士才町のお茶ノ水橋付近からのものがそのまま残っていたからです。

工場の設備 広さは 七九六坪
建物の配置は次のページの図

動力は 水車 十五馬力

蒸気 十二馬力

機械は 紡績機(ミユール型)二千鍾

梳篠(綿)機 四台

精紡機 四台

線綿機 三台

開綿機など一台ずつ 五種類

その他の機械がありました。

水車をまわす水を引く水路は江戸時代のものそのまま使いました。排水口は今も保存してあります。

兵庫縣権令
今の知事、当時は権令といった。

洋式工場の初め

慶応二年(一八六六) 鹿児島

明治三年(一八七〇) 堺(大阪府) 鹿島(東京都)

明治三年(一八八〇) 姫路 広島

明治四年(一八八一) 岡山

(増田重信氏提供)

工場が建つたのは一二年一二月、操業し始めたのは一三年六月から。

仕事を覚えたい希望者が多かったので一六年一〇月、千鍾増して二千鍾にし、蒸気汽罐をとりつけた。

紡績所を閉じる

この工場に何人の従業員が働いていたか知りたいのですが、資料がありません。のちの記録からの推測ですが、百人ぐらいだったでしょうか。

おおぜいの人が機械で物を作るという近代的な工場は初めてのことなので、どうすれば能率が上がるか、とまどうことが多かったでしょう。それで毎年千円の損をだしたといえます。

明治十三年より十七年八月までの計算書によると

出の部 三万二、三〇四円七〇銭九厘
 入の部 二万七、三六九円九三銭八厘
 差 引 四、九三四円七七銭一厘の損
 となりました。

ここで県令は十七年十月、政府に「官営では能率が上がらないので民間に払い下げたい」と申しでたところ、翌十八年八月その許可があったので、兵庫県立姫路紡績所は五年で歴史を閉じました。



▶ 姫路紡績所の排水溝

左奥からきた水が水車を回わし、右へ折れて船場川へ流れ出た。天井は厚い板石が並べてある。

姫路紡績株式

明治十七年八月から休業し

会社に変身

ていた工場は翌十八年十二月、藤井九二吉（東京）嘉納量三（御影）の二人に二万五千円で払い下げられます。

けれども不都合なことがあったので、ここでは猪飼徳兵衛（大阪）に払い下げられました。休止していた工場はこの人のとき動き始めたようです。

しかしこんども、なにかの事情があったのでしよう、二十一年十一月、渋谷庄三郎

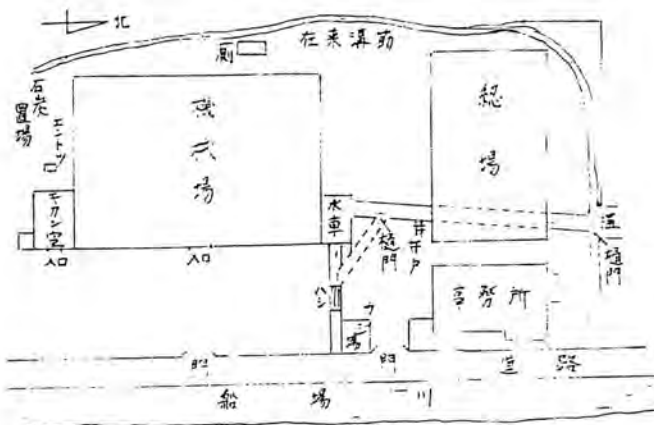
の

県令

権令からこの名に変わった。

▲ 姫路紡績所略図

（増田重信氏 提供）



にこの工場をゆずってしまっています。

渋谷は田中市兵衛(大阪)、浜本八治郎(福中町)、三宅純一(龍野町)、田村九一(鍵町)らとともに経営しました。

しかし、またまた渋谷がやめてしまいました。それで三宅が社長になり、浜本のほか谷村又治郎(相生町)、岡政平らが取締役にになりました。社長、取締役というから会社です。

株式会社になったのは二十一年四月のこと、七月一日から姫路紡績株式会社と名になります。

この間の移り変わりは資料が少ないのではつきりしません。だが目まぐるしく変わっていったことだけは分かります。明治政府は殖産興業、富国強兵を旗印にしました。が、それをおし進めた地方の人々の苦勞、舶来品におされてうまくいかなかった様子がしのべれます。

会社の規模

会社になってから設備を少しふやしたようです。

リング紡績機 二七五二錠を増加

(前の二千と合わせて四七五二)

水車を構内の南部に移し、大野川へ排水

(筋違橋の少し西に排水口が見える)

工員 男 五三人 女八一人

寄宿舎 船場川の対岸 坊主町の南端

会社の遺構

昭和五十八年二月、家の改築現場を増田重信氏が調査され

たとき、たくさん煉瓦がみつかりました。

煉瓦には文字がありました。また焼けたのもあって、明治三十二年におこった会社の火災を物語っています。

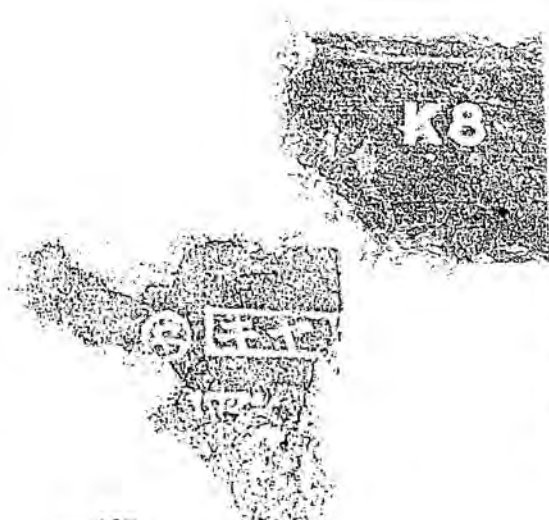
また煉瓦が並んでいる所もみつきり、会社の建物の土台は煉瓦づみだったことも分かりました。

水車の水路は田麿製麵所の地下に今もあります。写真に見るような構造です。この石づみは江戸時代のままではなく、一部を積みかえています。会社を造るとき手直したのでしよう。

排水口は対岸の白川神社本殿の裏からよ



排水口
水車を回した水は、手前の船場川へ流れ出る。排水口の天井には厚い石を渡して上が道になっている。



◀紡績所跡から出た文字のある煉瓦
(増田重信氏 提供)

く見えます。船場川の護岸工事計画のとき増田氏が、市へ意見を述べられた結果、見えるようにのこされました。紡績会社ただ一つのモニユメントです。

この排水口からは蒸気汽罐で熱して余ったあつい湯も流しだしていたようです。

「夏の暑い日には、男の人が裸になつて、ここで汗を流していた」 (矢内たつゑ)

「わし(私)も入ったことがある」

(松尾孝太郎)

綿や石炭など車に積んで遠くから汗をかきながらやってきた人々には、たまらなく良い露天風呂だったのでしよう。

明治三十二年十一月九日

『神戸又新日報』

第四千八百二十五號

姫路紡績会社の火災

一昨七日午前九時四十分頃より姫路紡績会社より出火し、さしも堅固なる建物の僅々二三時間に烏有に歸したる事は前號に其の電報を掲げしが

会社が焼ける

進んだ設備もなく、輸入品におおきながら、なんとかつづけていた会社でしたが明治三十二年十一月七日、火を出して丸焼けになつてしま

います。八日の新聞に第一報が伝えられ、翌九日に状況がくわしく報道されました。

火事の新聞報道

火事の様子を伝えている

新聞を転記してみました。この記事で火事のこまかい様子までわかりますから。

この新聞は一段が二十一字づめで一行が長くなっています。また、や。がないので文のくぎりを考えながら読まねばなりません。

日八月一十年二十三治明(二)



▲火事の第一報は翌八日の電報欄に載せられた。(県立図書館)

「神戸又新(ゆうしん)日報」

明治一七年—昭和一四年六月三〇日の新聞。

二方面を増資し以て挽回する事に決議し爾來事業を継続中此處兩三ヶ月間は意外に収利を見るに至り株主も稍安堵の体にて現に兩三日前に於て某株主の如き多数の拂込みを爲したりと而して会社の現在役員は社長に神戸嘉平次、取締役に濱本八治郎、三宅六藏、谷村又藏の四氏にして谷村氏は日下海外に渡航し商業視察中なるが氏は増資維持には最も熱心なりし人なりと扱出火の原因を聞くにインチンの油を注入すべきを怠りし爲めシヤフトの摩擦より発火したるものにて火は忽ち塵綿に移りスワといふ間に注入の油に燃移り落綿に傳播せしゆゑ消し止めんにも寄附く能はざるを機掛掛けの當務阿部彌三次は必死となつて消防に盡せしも如何せん久しく油染みたる木製機器に燃移れる事とて見る見る濕機濕罐の隣室より焼け始め数棟一面の猛火となりしにぞ阿部は素より工女技士等は辛くも其身を遁れ出でて九死に一生を得たるのみ負傷者を出さざらしめたるは未だしもの事といふべしかくて火は職工場六百三十六坪一合五勺を焼き落綿撰場七十一坪、機関室及び電気室四十二坪八合三勺を焼拂ひ食堂及、裏門一坪、事務所一七坪に延焼し濕綿部三十五坪七合、其他附屬三棟をも、撫でに撫で了り飛火は船場川を越

江て向ふ岸なる坊主町三十一番地上族荒井廣藏方の屋根に移りたるも屋根のみを焼きて僅かに消し止め同三十三番地中島覺八方は半潰れにて類焼を免がれたるが此に不思議なるは右両家の間にある白川稲荷神社といへるは有名なる稲荷にて常に眼病人の祈願を籠るもの絶ゆる時なく妻子と共に籠り祈禱を爲す者に尠なからざる上怪しの長屋建稠密し且つ飛火の真向ふに當るにも拘らず烟の跡さへ附かざりしには迷信家の益々迷信する事ならん其他同会社の北隣八代村六十番地岩田實藏方は半潰れとなり風は最初南東なりしも後東風と變じたれば幸ひにも總場(六十三坪)倉庫一棟(四十八坪)を残し午後一時三十分頃鎮火するに至りたり但し工女寄宿所五棟二百七十三坪六合は川向ひの遙か南端にあるを以て毫も火災の憂ひなかりし此際スワ火事といふや大塚姫路署長全市に警鐘を傳へしめ奥村警部以下數十名巡查を随へ逸早く現場に駆附け次で第一第二の消防隊も來り濡鼠と成ての働きは目覺しく見江たるが元來同地は表に船場川の流れ浅からず尚ほ向ふ岸の前面に城廓の外壕を扣え会社の裏手は小川溢流し居れば水の手は極めて便宜を得たる所に於て障碍となる人家は尠く、裏手は田畑を以て圍ひ居る上に播磨紡績本

神戸嘉平次 姫路・和泉町の人

濱本八治郎 姫路・福中町の人

洋反物商。姫路紡績、姫路商業銀行を設立。姫路商業會議所会頭。

三宅 純一 姫路・竜野町の人

明治一九 勸業諮問會議員

〇〇 山陽鐵道会社発起人

〇一 姫路紡績会社社長

〇二 姫路市會議長

〇七 北海道農業合資会社

〇九 発起人

〇九 播磨紡績会社発起人

(妙立寺・墓碑による)

第十師団

明治三一年につくる。その構成は歩兵第一〇連隊(姫路)、同四〇連隊(鳥取)、同二〇連隊(福知山)、同三九連隊(姫路)、騎兵、野砲兵第一〇連隊(共に姫路)工兵第一〇大隊(福知山)、輜重兵第一〇大隊(姫路)。

徳寺、電燈会社其他の私設ポンプを揃へて消防に指揮に頼る當を得たれど如何にせん恰も油樽を焼棄つるが如き木造物の猛火に化し去りたる事として著しき効を見ざりしは是非も無き事なるも倉庫及び総場に延焼を避けしめたるは姫路署の消防指揮與かつて力あるものといふべく又大塚署長は逸早く火事場に馳せ付ると同時に会社前の街路に巡查を配置し消防夫及び会社員の外銀りに往來を許さず只管負傷者ならしめん事に尽力したれば白晝とは云え斯る大火なるにも負傷者の如きは私設本徳寺消防夫暨町横田熊太郎の外僅々三四名の軽傷者を見るのみなりしが茲に第十師團第十聯隊の裏手即ち白鷺城の西北隅には最も警戒を加ふべき火薬倉のありて恰も姫路紡績とは僅かに外塚と船場川を隔つるのみ猛火天を焦がすの時は塊火の飛散甚だしければ万一の事ありてはとて非常に警戒を加へ居たるが目下各隊の秋季演習に行軍中の事ゆゑ其の混雑は一方ならざりしとぞ扱又今回の損害を聞くに總計十萬七千四百四十九圓五十四錢七厘にして内譯すれば建造物の損害一萬二千九百四十四圓、紡績器械八萬四千七百七十二圓十五錢一厘原料三千二百六十圓、製造品三千七百三十三圓三十九錢六厘、之れに對する保險は東京火災保險会社

へ九千圓、酒造保險会社へ同じく九千圓の二日にて昨年十二月一日より一ヶ年の保險契約を附し居り今日迄の拂込みは五百九十四圓にして來る十二月一日迄の契約なれば今日餘日間を経過しなば無効たるべかりしに契約中の火災は紡績会社の爲には不幸中の幸ともいふべきか當日火災の電報に接するや横濱火災保險株式会社より社員一名直に出張し目下検査中なるが姫路市に於て保險契約の火事沙汰は今回を以て嚙失なりといふ又同会社の火災と聞くや大阪神戸其他地方の銀行会社關係者等より見舞の電報陸續あり寄贈品は積んで山を爲す許りに同社にては附近の人家を借受け見舞受けの事務所を特置し鎮火後引續き事務を執り居れり何さま火事珍しき土地の事とて見物人は黒山を築き同夜の如きは残火尚消江ざる爲一層嚴重に取締りしといふ。

火事の思い

紡績会社の火事るときには、城北小学校の運動場まで黄色い、油くさい煙が南から流れてきた。プーブウーブウーと、哀れな音をだして会社の汽笛が長いあいだ鳴つとつた。

(矢内たつゑ)

播磨紡績

国衙村ノ内北条村に明治二八年四月設立。資本金四五萬五千圓の株式会社。明治四五年六月二四日福島紡績に合併。

白川稲荷神社

白川神社が正しい名。寛延二年(一七四九)姫路城主になつた酒井忠恭が前橋から移し、姫路の守り神としたお社。神紋は酒井家紋の劍カタバミの中央に宝珠をつけたもの。入り口に姫路紡績の従業員が明治二八年に寄進したシメ柱が立っている。

(中垣内の)家から荷物を背におうて南の田へ出た。だいぶん離れていたのに(百ほど)顔や体があつかった。(矢野武市)

播陽時計会 明治二十一年、呉服商の矢内社をつくる 三次郎(福中町)、尾上久三郎(大

野町)が八代本町一丁目10番33号のあたり、白川橋の西につくりました。その当時あつ

た姫路紡績会社の南となりです。そこにはもとの白川学校の校舎があつたので、それ

を工場にしました。資本金は二万円、機械は神屋にあつた時計会社の開成社から二十

年八月に尾上久三郎たちが八百円で買い取り、翌二十一年四月に播陽時計会社と名づけ矢内が社長になりました。

時計を作るには

動力はブリ輪と水力です。

ブリ輪とは径七尺の車で

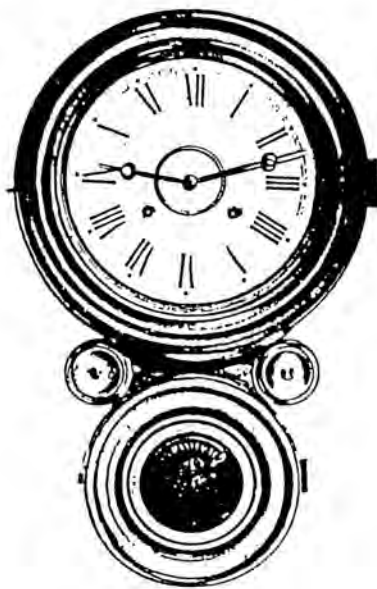
す。くわしい形はわかりませんが畳二枚より大きな車で、人が回したのでしょうか。水力も使ったというから、この工場の西を南へ流れる水路に新しく水車をとりつけたようです。

職工は七十人ほど、仕事を失った田姫路藩士でした。アメリカ人の技師ひとりから指導を受けました。アメリカのイングラハム社の時計をモデルにしたようで、シールも英語で書いています。

最盛期には一日に一ダース(十二台)作りました。

今も動く 四つ目と八角の二種類あります。播陽時計 八代公民館には四つ目時計が保存されています。この時計は、昭和五十一年夏、ときの自治会長坪田恒雄が、「わが町

内で百年前に製造された由緒ある文化財が人手にわたるのは惜しい、ぜひとも地元



播陽時計

高さ 54.5cm
幅 33.5cm
厚さ 7.5cm

置いて証あかしとしたい」と、役員さんたちに力説して購入できたものです。今もネジを巻くと動き、ボンボンと時も打ちます。

側面は木を薄くして円く曲げてかこい、正面は金で縁取りしています。振り子室の奥壁には、黒の紙に英語の金文字で書いたシールが貼ってあります。

初めてこれを見たとき、「なぜ日本人にわからない英語で書いたのだろう、西洋カブレをしていた時代なので、英語で書くといきな感じがするからだろうか」と思っていました。ところが新しい資料が見つかる、それは輸出品としても製造したからということがわかりました。

当時わが国は工業がおくれ外国からの輸入がふえている。「このままでは日本の将来があぶない、なんとか輸入をくい止め、国じゆうにこの時計を行きわたらせ、外国にも輸出しよう」との意気込みで会社を造ったことがわかりました。

高い理想をもって始めた会社でしたが、

経営がだんだんいきづまり、ゼンマイにするハガネも入荷しにくくなったので、二三年に会社を閉鎖とざします。その間は三年でした。設備は名古屋の時盛社ときせいしゃに引き継がれました。



シールの中心部には、次のように書いてある
(字が読めなくなっている所がある)

DIRECTIONS FOR REGULATING
if the clook runs too fast, lower
the ball, if too slow raise it
by means of the nut under
the ball

調節方法

時計が進むようならボールを下げ、おくれるようなら、それを上げよ。ボールの下のナットを回すことによって。

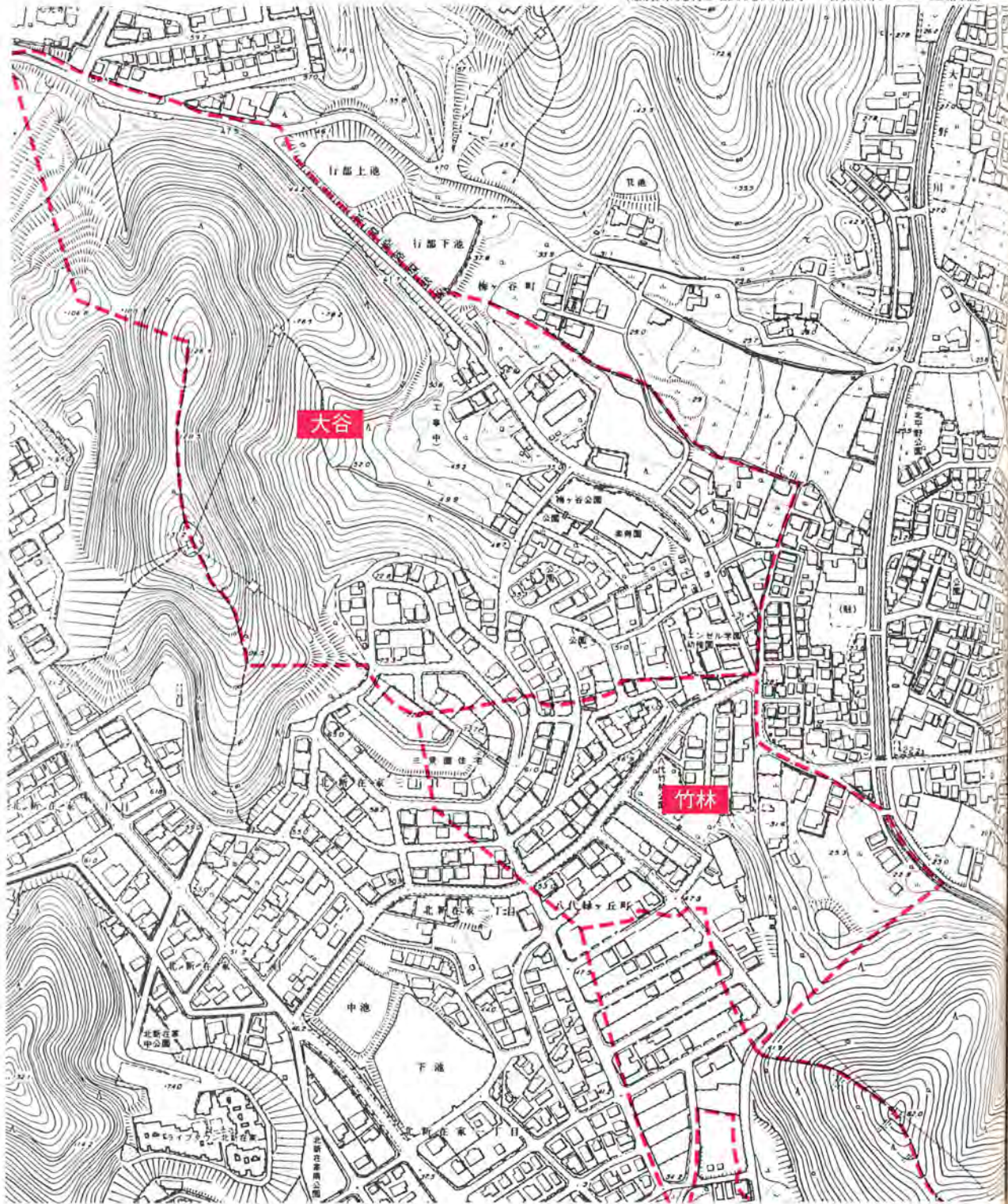
▶ 八代公民館の播陽時計には
こんなラベルが貼ってある。
これを修繕した店のもの。

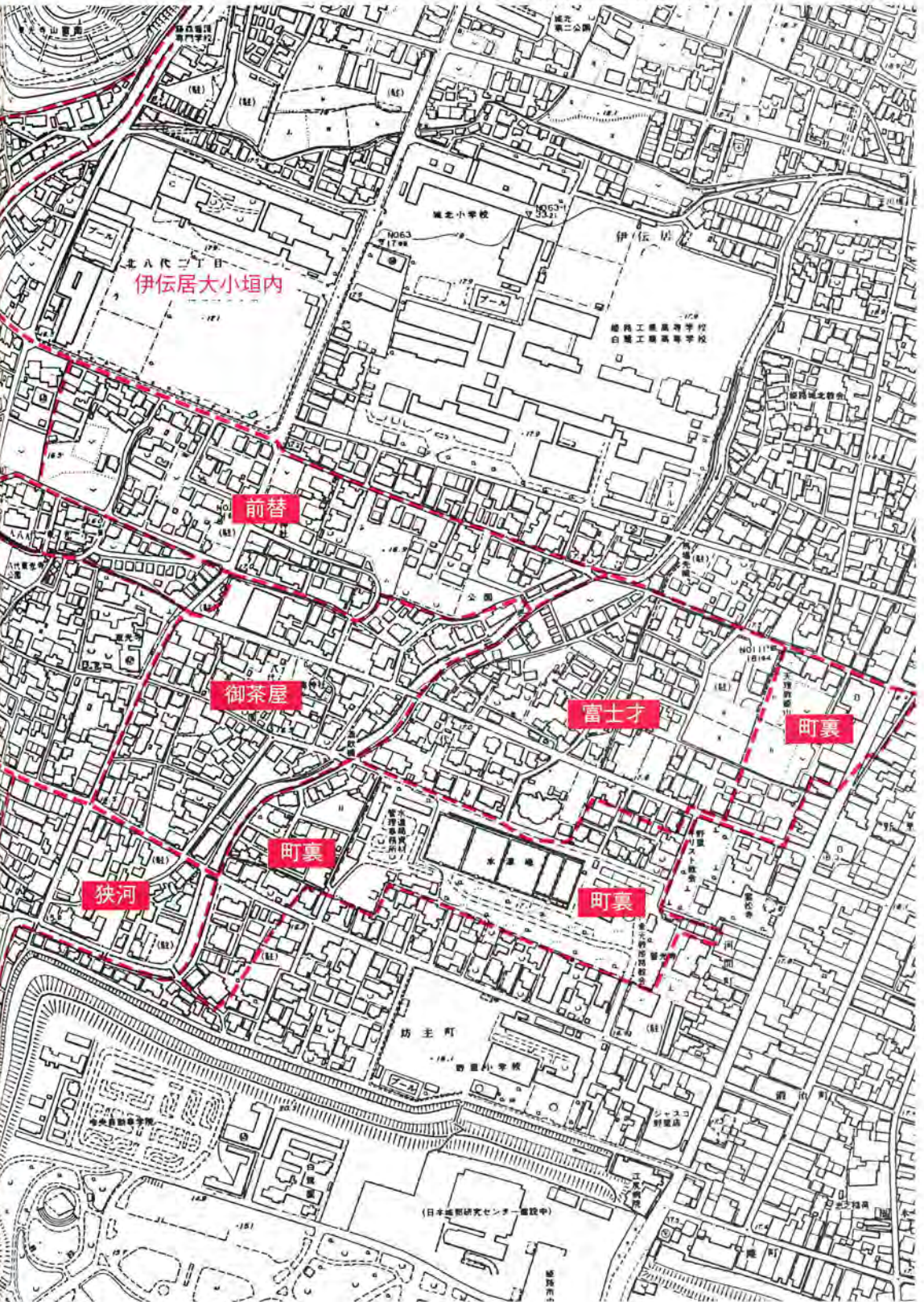
合請年ヶ宅外損破
日五十二月一十年五正大
町本田三郡馬右
舗計時瀬平

八代北部の現状と字との対照図

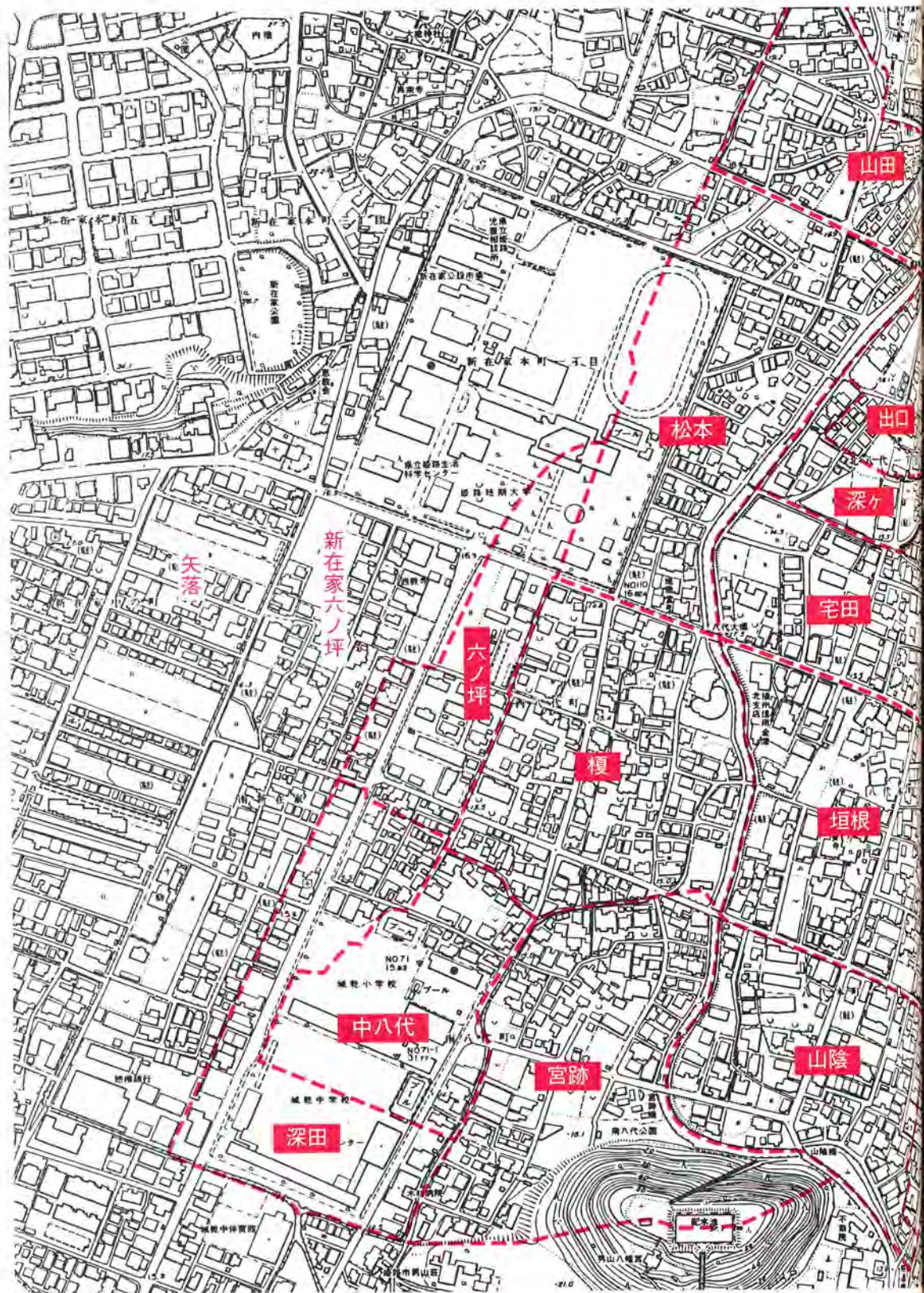
昭和37年法律第119号より住居表示
地区は字を廃止しています。

(姫路市発行1:2500より縮小 昭和57.1バスコKK調整)



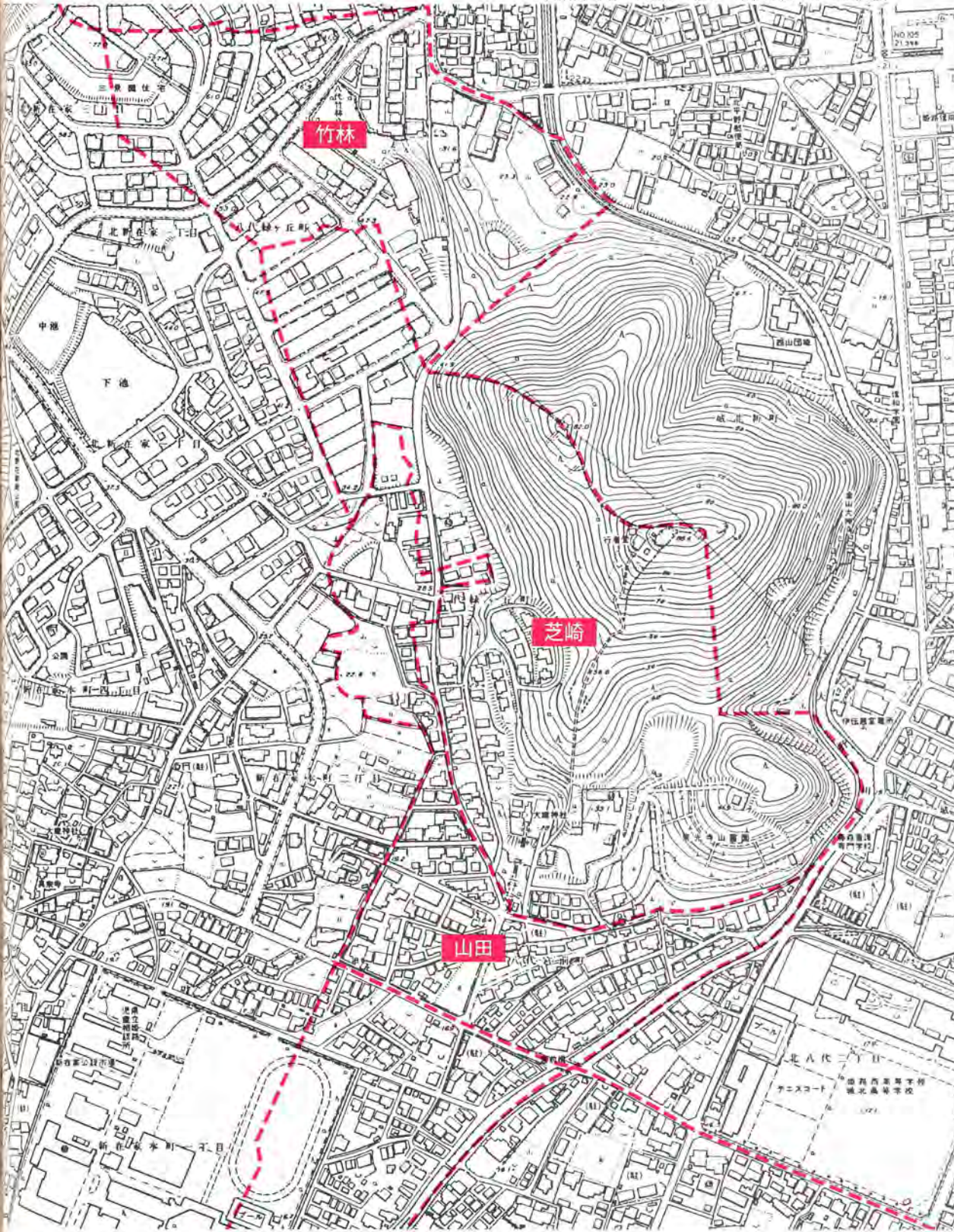


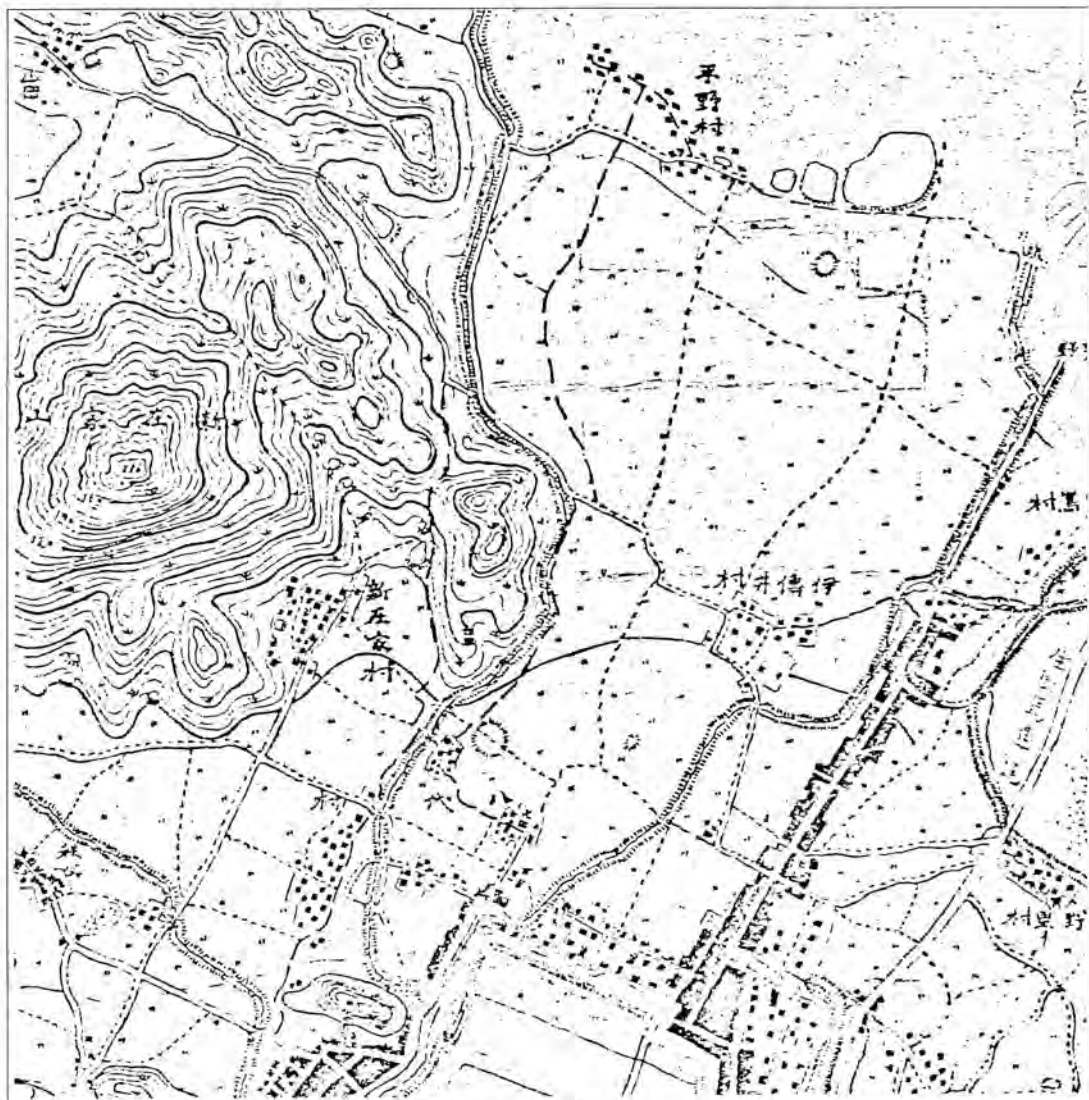
八代南部の現状と字との対照図



八代中部の現状と字との対照図

(姫路市発行1:2500より縮小 昭和57.1/バスコKK調整)



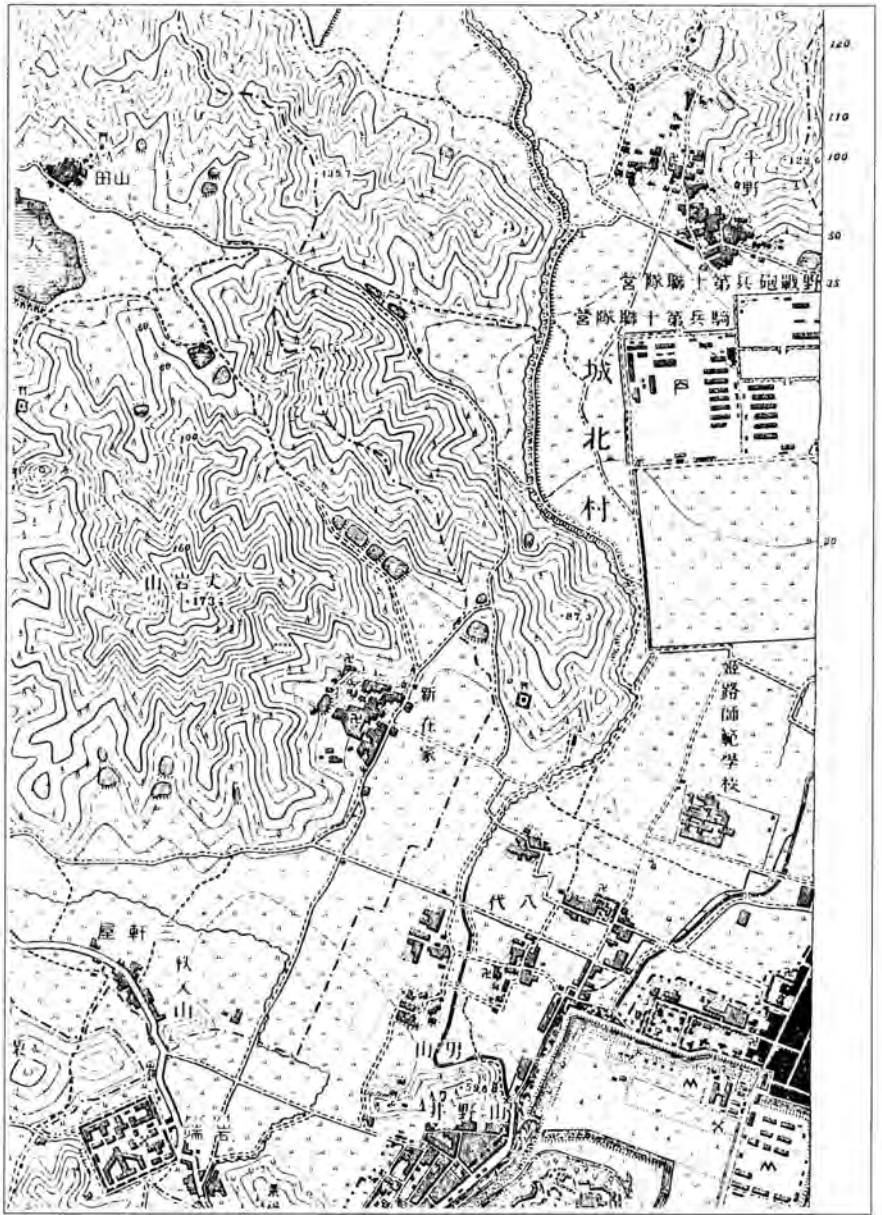


明治20年代の地図

この地図は多田初治氏が持っておられたもので、原図の欄外に、「歩兵第十聯隊」と書いてあるので、十聯隊が発行したことがわかる。

城北練兵場も八代新道も播但線も書いてない。「白国」、「生野馬車道」、凸は多田氏が鉛筆で記入されたもの。播但線は明治27年にできたから、この地図はそれ以前のもの。また欄外に「至姫路市」とあるので、明治22年4月以後に作られたことがわかる。

右上の広嶺山は空白になっている。実測図としては最も古い。



▶二万分の一 地形図

明治二十六年測図 明治四十年第一回修正版
 明治四十年二月発行 大日本帝国陸地測量部

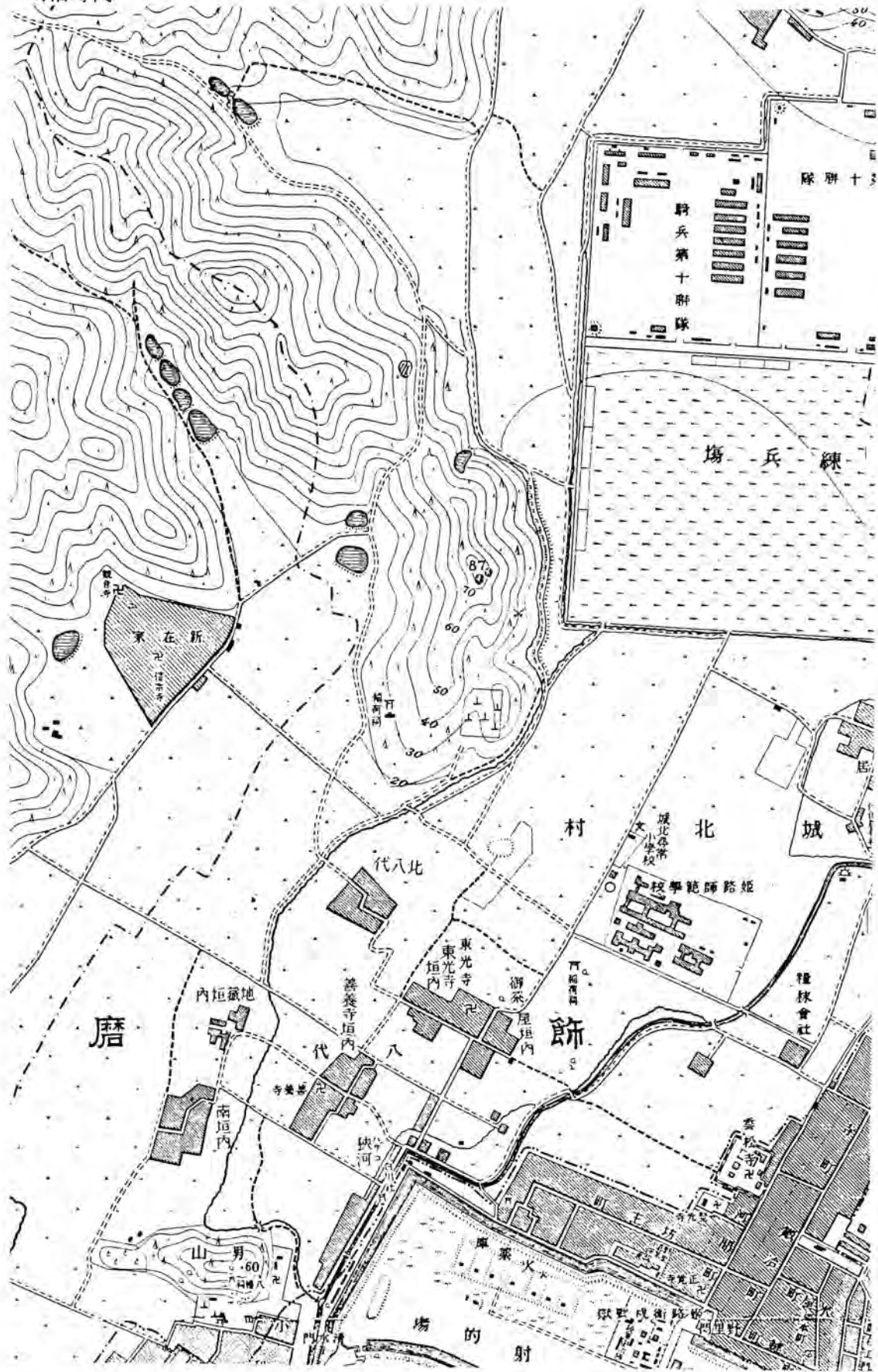
◀「姫路市及其附近」

明治33年測図 明治34. 3. 30、第十師団司令部発行。

この地図は明治40. 7に訂正再発行したもの。練兵場を走る線は、海拔20mの等高線。右上に30m線が見える。八代の垣内の名が書いてある最初の地図。山すそにある大蔵神社を稲荷祠と書き違えている。また神社は二つあったが、一つしか書いてない。

◀糧秣会社

正しくは姫路糧秣合資会社。城北51号線の北側、伊伝居、マシジョン「ジュネス伊伝居II」の所にあつた。軍馬の干草を買い入れ、保管する倉庫。もと、ここに明治二十年に伝世尋常小学校、伊伝居簡易学校、明治二四年には城北、水上の二つの小学校があつたところ。



三つの水車

船場川は、ときどき大水を起
こしたが、めぐみを与えてく
れる「母なる川」です。

昭和の初めまでは八代に三つの水車があ
って、産業の発展につくしていました。一
つは姫路紡績のあとにできた水車、二つ目
は次の項で説明する北山水車、三つ目は岩
田水車です。

北山水車

八代本町二丁目5番27号、28号、
29号にまたがってありました。

始まりはよくわかりませんが、石田友吉(今
宿の人)が経営していたのを明治二十二年五
月、北山重次郎が買い取って、引き続き精
米しました。米をつく白は六十九基、明治
三十四年にさらに八基ふやしています。

大正時代になって、だんだん精米から製
粉(そうめん用の小麦粉)にかわり、大正末に
は製粉が中心になり、営業は勝岡氏にかわ
り、昭和三、四年ごろまで水車は回ってい
ました。

電気の普及で水車はだんだん使われなく

なったのです。

水車を回すには

水車を年中まわすために
は、いつも水を流してこ

なければなりません。北山水車の水は「宅
田ゆ」(↓折込の用水路図)を利用しました。

「宅田ゆ」は水車を作るよりはるか昔に百
姓たちが掘った用水路です。これを利用さ
せてもらうとなると秋冬に百姓に迷惑がか
かります。田に水がいらなくなる秋から冬
に水を通すと、水路の両側の田に水がしみ
て土がやわらかくなり農作業に困ります。
冬いっもしめっている所は麦が育ちません。
水車は八代村と貸借契約を結び、毎年湿気
地米として米六石五斗二升七合を八代村に
出すことにしていました。

それだけではありません。溝の中に長い
木や枝がひっかかると流れが悪くなる、水
がせきとめられてあふれるかもしれない。
水がもれているところがあって上手が切れ
るかも。それで毎日のように水車の人水
路を見て回りました。肩に鍬をかついで南



田摩水車の地下水路 (昭62.12 矢内 写)

水車はこの奥で回っていた。天井には厚い
石が並べてある。明治の姫路紡績の水路を
使っている。

から北へ、北から南へ、溝をのぞきこみながら、雨の日は藁わらと笠かさをつけて。



宅田ゆ（車溝）の護岸工事（昭31.1 矢内 写）

工業高校の東で船場川から分かれて南西へ流れる用水路。兩岸に杭を打ち、竹を横に編んで護岸していたが、コンクリートで固められた。

〈部落有の山を売った金で、この工事をした。〉
（渡辺 弥市）

右はいま、八代富士才公園になっている。

昔のくらし

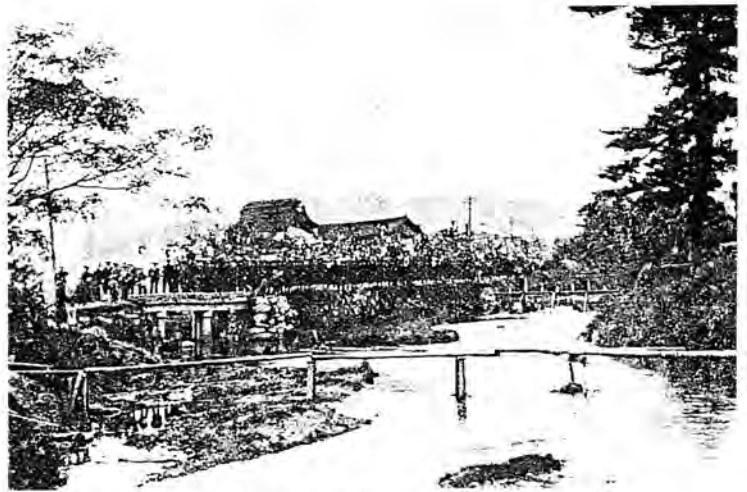
この項では広嶺中学校の「郷土研究クラブ報告」(昭二上六・発行)から抜粋して、昔のくらしを見ることにしましょう。

(一)内はこのたび補足した部分です。

〃 老婆の昔がたり 矢内 澄

祖母は私が小学校に通っている頃、八十才でなくなつた。弘化四年の生まれである。

秋の白い陽の光が縁側いっぱいにしこ



岩田水車（今の清水橋付近より北望）

低い屋根の水車場は向こうの家の右にある。水車のすぐ前で船場川をせきとめ、道の下を水を通して水車を回した。木製のダムが遠くに、かすかに見える。手前の木橋は清水門への橋。その向こうの筋違橋すしがひは石橋だった。石材の一本は不動院に残してある。この写真は姫路中学城北校舎落成記念提灯行列（明治42年）を写したものの。『姫中・姫路西高百年史』

御用水車の跡は姫路紡績↓○○○○
↓西村水車↓田麿水車と変わる。(↓年表)。○○○○は不明。

んでいる時など、日向ぼっこをしながら、柿の皮をむきむき、四方山の話をしてくれたものだった。私は今もなお縁先の柿が色づいてくるたびに、祖母の話した物語を思い出す。

ひろびろと続いた田の中にけぶる農村、その中に働く農民の姿、ぼつりぼつりと話した祖母の話は、幼い私の心をお伽の国へ走らせ、夢の彼方に遊ばせるのであった。

冬ともなれば西風がひゅうひゅう吹いて、姫路にも雪や霰がいく度となく降ってくる。地面の凍ては十時か十一時にならないと解けない。百姓は、朝暗いうちに起きて肥取りをすませ、それから朝食をとって再びコタツにはいって、凍ての解けるのを待つ。

それから田んぼへ出て行く。ごく寒い日など仕事か思うようにできない時には、村人が四、五人もいると、「まあ一服」といって、ツボケのかけで火をたいて、夕方近くまで話をして帰ることもある。

「そりゃあー随分のんびりしていたんや」

「今のように忙しそうにはしとらんんだ」
「それにワラもたき放題やった」

昔の百姓はゆつくりしたものだっただけ。農業の多角経営だの、発芽促進法講習会だのといったことは彼等には思いもかけぬことであって、鎮守の神の祭が唯一の楽しみである。働こうと思っても、それほど仕事も無かったわけで、母の若い頃でも、村（新在家）の若い衆は「今日はなにも仕事がないから」と言つては、一里も二里もある氷室池（夢前町）まで、腰弁当で四、五人連れだつて柴刈りに行く。そうして二、三束おつて帰りには、野里（商店街）へまわつて三錢五錢を得て帰る。……略……

祖母の話した物語は、幕末から明治にかけての話である。なにしろ八代から野里までの間には、家が一軒もない時代で、となり村へ行くにしても、田の中を曲りくねつた、ともすると水のたまりがちな、細い道があるだけの頃のことである。

「北八代から野里へ買物に行くのにはな



地下は肥えだめになっている。



田の中にわらを集めてつみかさね、雨がはいらないように屋根をする。丸いものと、長四角のものがある。



ツボケにはいろいろある。

あ、今の師範学校の前の広い道なんどあらへん。うちの前の道がついとただけやったのや」

「これが伊伝居と八代の境でな、車力がやつと通る位なものやった」……略……

「それから師範学校が出来たり、中学校が出来たり、高等学校が出来たりしてその時に、こんな道がつくようになったのや」

「新道がついた時には大きな道やなあと思いよった。西側には家が一軒もないさかい、通りよる人がよう見えよった。かねの輪のついた人力車がカラカラ、カラカラ高い音を立てて走つとつたのが、うちからもよう見えよったで」

嫁入りの荷をかついだ行列が、お地藏様の前を通つてはいけないというのでわざわざ大まわりをして行く話、若いお嫁さんが里帰りだという時には躰さんが前に子供を、後ろに土産物やら荷物を入れた籠を棒で担つて、その後から嫁さんが姉さんかぶりをし、着物の裾をはしよつて、東の船場川の

川堤をよく通つていたものだという話もしていた。当時の船場川はもつともつと水が深くて、岸の両側から綱で舟を引っぱつて、野里の辺まで往来していたそうさ。

「その頃は、いまの姫中や師範がある辺は畠で、秋になると一面に棉の白い花で埋まったもんだよ」

「棉がとれる頃になると、野里から綿屋が大きな紺の風呂敷をくびから背中へかけて、一軒一軒まわつて綿を買いに来よつた」その畠の中には大きなキシが、あちらこちらにあつて、牛飼いの子供がよく集まつていたともはなしていた。

キシというのは、昔開墾の時にとりのけた石を、捨て場がないのでひとところ高く積み上げて、塚のようになったものをいうのだそうさ。それが姫路中学の辺に二つ、師範の中に三つあつたとも言つていた。

「家の東の田んぼは、道から大分低うなつとるやろうがな。」

「この辺まで畠やつたんやがな、師範学



東束は四つまとめたものをいう。掛保郡では、

植林契約書（明三五、一〇、一七）により氷室山は大野村、八代村、新在家村などの入会地で、柴刈り、植林をしていたことがわかる。

新道：今の八代新道を通る姫路環状

線。

土ふこ（巻）

土を運ぶのにワラで編んだ入れもの。

校が出来る時、地あげの上をここからとつたんや。おせい人夫が来て運んだんやで。」

「トロツコなどあらへんさかい、土ふこに入れて一ぱい一ぱい担うて運んだんやで。それで畠が田んぼになつたんや」

……以下略……

八代に関係するところだけを再録しましたから最後がしり切れとんぼになつたことをおことわりします。

西南戦争のとき 矢内惣吉（おとうま）さんのお話。惣吉さんは当時は子供だつたので思いでも簡単です。

北八代からも一人、お城の南の十連隊に入営していた人があつた。

ある日、村の東の道から金輪の人力車のカラン カラン カランという音がしたので出てみると、○○さん（名は筆者が覚えていない）が降りてくる。胸にアバラ骨のような飾りを何本もつけた軍服姿。みな「立派になつたナアー」と。

話を聞くと、「薩摩の戦争に行くんで今夜

一晩、別れに帰つてきたんや」と。

（矢内 澄）

明治の思い出

次の文は河間町の飯塚さん（こはまさん）のものです。河間は八代の

東隣の町、この思い出話は八代にも共通するところがあるので老人大学の文集から転載させていただきます。

飯塚善治

私は明治三二年（一八九九年）に野里河間町に生まれた。天皇陛下がお通りになるので、どこの家々も表戸を締めて幕を張り道端にむしろを敷いて正座をして、お迎えしたことをおほほげに覚えている。当時は陛下のお通りになるのに、長い長い時間があるのに憲兵や騎馬巡査が駆け廻って、頭を上げたり大声をあげて話などしていると、どなりつけられたものであつた。先頭の近衛騎兵が見えると、最敬礼で馬のひづめか、せいぜい馬のすねの高さまでより顔をあげて見ることは出来なかつた。

陛下のお供の行列が通り過ぎてからでも、表の道を歩くことは出来なかつた。

私は父の肩車で城北練兵場（今の競馬場）へ行つて観兵式を見たが、大勢の人垣の後から見たの

出征兵士を送つた時の歌

討て討て露国 討て露国

力の限り 根かぎり

討つて殺して つくすべし

露国は日本の しんきゆうぞ

千島・樺太 交換や

遼東半島の 屈辱や

皆かれ露国の 業なるぞ

あくこそあるし ロスキーの

強欲非道の わざなるぞ

臥薪嘗胆 十年の

遺恨はいかで 忘るべき

悲痛はいかで かさぬべき

命は君に ささげたり

わが身は国に ささげたり

大元帥の 大帝

帝の声は 神の声

すいこけんげき ものならず

御国のためとあるならば

なぞて惜しまん わが命

矢玉の雨も なんのその

しゅう露の肝を ひしがずば

生きて再び 帰りこじ

蛮露に仇を かえさずば

死すとも一歩も しりぞかじ

精悍無比の 日本国

中にも猛き 十師団

師団の兵の胸のうち

おどるは心 この心

と、未だ幼児であったので何が何んだったか覚えていない。

後日になって父から聞かされた話であるが、明治三六年に陸軍特別大演習が播磨平野を中心に行われたので、天皇陛下がおいでになり、大演習をご覧になり、城北練兵場で大観兵式が行われるので、その御道筋として此道を広くしたのである。旧道は荷車がどうにか通れる程の道で、野里門の所で濠に添って紅屋の七ツ窓の蔵の下を通り鍵町、橋之町を通り内町へ通っていた。

その当時の野里門は軍隊の営門と同様で、一般人の出入りは出来なかった。

この野里門の石垣や土塁を取りこわして、濠を埋め立てて、駅前から新しい道が城北練兵場まで出来たのだと教えられた。

河間町の北端の火の見櫓の所から百米ほど旧道の名残りが今裏道のように残っている。

河間町の北から城北練兵場までの坦々たる新道の両側は一面の田であった。(明治末期迄)

今は家が建ちつまり、南部は八代新道、北部を伊伝居新道と呼んでいる。

……中略……

明治三七年に日露戦争が始まったので、この道は毎日毎夜出征する兵隊さんの見送りの為、仕は

日の丸の旗、夜は紅玉の提灯で、みな元気に歌を歌って送り出した。

「天に代わりて不義を討つ、忠勇無双の我兵が、歓呼の声に送られて、今ぞ出で立つ父母の国、勝たずば生きて還らじと、誓う心の勇ましき、等の歌をうたって見送った。(六、七才の頃)」

そうして三八年に旅順の要塞が陥落し、つづいて奉天占領と号外が飛ぶ毎に街中は、万歳万歳で、又々は旗、夜は提灯の波であった。

……中略……

そして九月に戦争が終わると子供も喜んで、日本勝った、日本勝ったロシヤ負けた」と歌ったが、その頃流行した歌が思い出される。一でいくさが始まって、二で日本の兵隊が、三でさがして進み行く、四で上官の号令で、五でゴロゴロ大砲を、六でロシアの赤髪が、七ツ泣き泣き逃げて行く、八ツ野蛮のクロバトキン、九ツ降参いたします、十でとうとう日本が勝ちました。

……中略……

明治末期には、時計のある家は町内に一軒か二軒であったので、母親達は色々なもので時間を想像してその日その日の日課を定めた。

日本毛織や福島紡績の汽笛(これをブーヒーぶう)



明治37年春大陸に出征する姫路師団
『龍田紡績八十年史』

日露戦争に行く兵隊を見送りに行った時の歌です。生前の恒木與助(大野町)さんから録音していたのを書きおろしました。恒木さんは当時は姫路師範付属小学校一年生、六〇年後に思い出して歌ってもらいました。子供のことですから意味がわかりないうま覚えでしたが、今となっては分かりませんので続けて書きました。

矢内りよう(伊伝居師範前町)さんも、この歌のはじめの部分を書いておられました。作詞、作曲は師範

一番のブーが鳴ると五時、二番目が五時半、三番目が六時と云つてその日の仕事にかかる。

当時お城の下で軍隊が正午を報ずる時報、午砲「号砲」をドンと云つた。この号砲を鳴らす野砲隊の兵隊さんが表を通ると十一時であるといつて狂の仕度にかかると。

また、物売り（行商）が表を通る事で時間を定め、豆腐屋さんが通ると三時、みそ屋が四時などと云つた上合に大体の時間が決まつており、夜は町内にある寺（雲松寺）の小僧さんが八時になると念仏を唱えながら寺内の諸堂を廻り、最後に鐘楼にのほり太太鼓を叩く。（これをドラといつて）子供達は床についた。

明治末期には電灯のついた家も少なくて、大部分が石油ランプであつたので、全体的に夜は早く床についたものである。

夏の風物詩としての思い出

盆前になると墓参用の灯籠を竿竹にかけて、とうろ、とうろ、折りかけとうろ、といつて売りに来た。神屋に大原という薬屋があつて、ここで作った蚤取り粉や蚊くすべを売りに来る人の売声が交わつていた。神屋大原製造のみとり粉請合蚊くすべなど云い。スローモ一の金魚売り、対照的に勇ましいのは、瀬戸内で捕れた鱒を前どれ鱒とい

う「前どれ鱒」「手手かむ鱒じゃ」と駆けずり廻る勇ましき。「かん水、氷」という売り声など今でも耳に残っている。

これらの総てが天秤棒を肩にしての行商であつたことも懐かしい。

水泳の稽古をした船場川や市川

私達は船場川の事を大川と呼んでいた。その頃の大川は水嵩も多く水も清らかであり、田植が始まるとどこの小溝にもきれいな水が流れるので、母親達は小溝へ洗濯に行く。

五ツ六ツの子供は、母親に連れられて小溝で雑魚とりをした。六月頃になると全裸になり、チャブチャブと水泳の稽古をはじめたものである。

そして小学校へ行く頃になると、大川の流れて遊ぶ間に泳ぐことができるようになり、又五、六年生になると市川へ出かけて泳ぐので、飾磨の海水浴場では楽に泳ぐ事が出来た。

……中略……

寛永通宝の一文銭を持って駄菓子屋へ喜んで飛んで行った明治三六、七年頃が、とてとても忘れる事が出来ない。

（史学科文集『てがら』第一集 昭和五〇年度 姫路市老人大学好古学園史学科発行）

学校の先生だとか。小学生たちは新道（今の県道姫路環状線）へ行き、日の丸の小旗を振つて歌いながら見送つたそうです。（矢内 澄）



▶ 正午のドン

大正四年三月、野里幼稚園二年修了時、姫山公園で写した記念写真の部分図。（寺田昌三氏提供）

土塁の上に大砲を据え、銃でかこみ、屋根も作っている。砲車の三分の一が見える。ここは、姫路神社のすぐ西のようだ。

乗合自動車

「明治四十一年、姫路市船場初めて走る」の商人、牛尾 庄吉が、全国で

勃興しつつあった乗合自動車に目をつけ、

姫路駅前―軍人橋に走らせた。

牛尾は欧米から輸入した自転車を広く西日本で売りさばき財をなしたが、生まれながらの機械好き。自動車部品など数十件の特許を持ち「姫路の發明王」の異名をとっていた。貸家二十軒を売り払って調達した五千四百円で大阪の商社から購入したのがフォード社のリムジン。当時、市長クラスしか乗れない車はたちまち話題を集めた。このリムジンより速く走って名前を売ろうとスピード競争をいどむ人力車もあとをたななかった。

牛尾の乗合自動車は好調なスタートを切ったかと思われたが、わずか一台で採算のとれるものではない。一年たらずのうちに廃業を余儀なくされた。」

（神戸新聞「百年百話」昭六三、一〇、二九）



▲座敷の天井はスノコ張り

十文字に渡した梁の上に太い竿縁、竿縁の上に太い竹を直角に渡し、その上に細い竹をギッシリ並べている。

八代に残った 八代本町一丁目11番17号最後のワラ屋根 （二丁目の北東角）に平成二

年三月までありました。

和釘が使われていたことからみると、江

戸末か明治初めに建てられた家のようにです。

屋根は、戦後トタンでおおわれました。間

口は約十二畳。ここはいま、駐車場になっ

ています。



◀昭和20年代の写真(矢内写)の複写
船場川が東から南へ直角に曲がる所にある。ワラぶきの様子がよく見える。右の家の軒下の石の道標は、いま八代公民館に保存してある。

城北村

◀城北村役場

ふるさとの思い出写真集 高橋秀吉氏編



城北村の範囲

明治二十二年四月一日から

町村制になり、姫路市の北

では城北村、水上村、安室村などが誕生しました。城北村は広峰山、平野村、大野村、伊伝居村、八代村、山野井村の六か村をまとめた村です。

ここで少し分りにくい点は、この六か村は昔からの村です。家が群がっているからムラと言ったのでしよう。ところが六か村をまとめた広い地域にも村の字を使いしました。村の中に村があるということになりました。けれども適当なことがないので、しかたありません。それで城北村という政治をするうえでつくられた村を行政村といえます。

そこで住所や土地の場所をはっきり示すには

兵庫県飾東郡城北村ノ内大字八代村

〇〇番地

広峰山

大正六年四月一日、広嶺山と改称。

山、浦（海岸にある村）は村と同じ。広嶺山には社家を入れて四十軒ほどあった。

ただし、神社は廣峯神社、学校は広峰小学校、広嶺中学校の字を用いている。

城北村役場

始め東光寺の中に置いたが明治三六年、飾磨警察署だった建物をゆずり受けて今の姫路市農協城北出張所の所に移築して役場とした。鬼瓦は菊の紋。

大正一四年四月、姫路市に合併後は市役所の城北出張所になる。老朽のため昭和三〇年撤去。

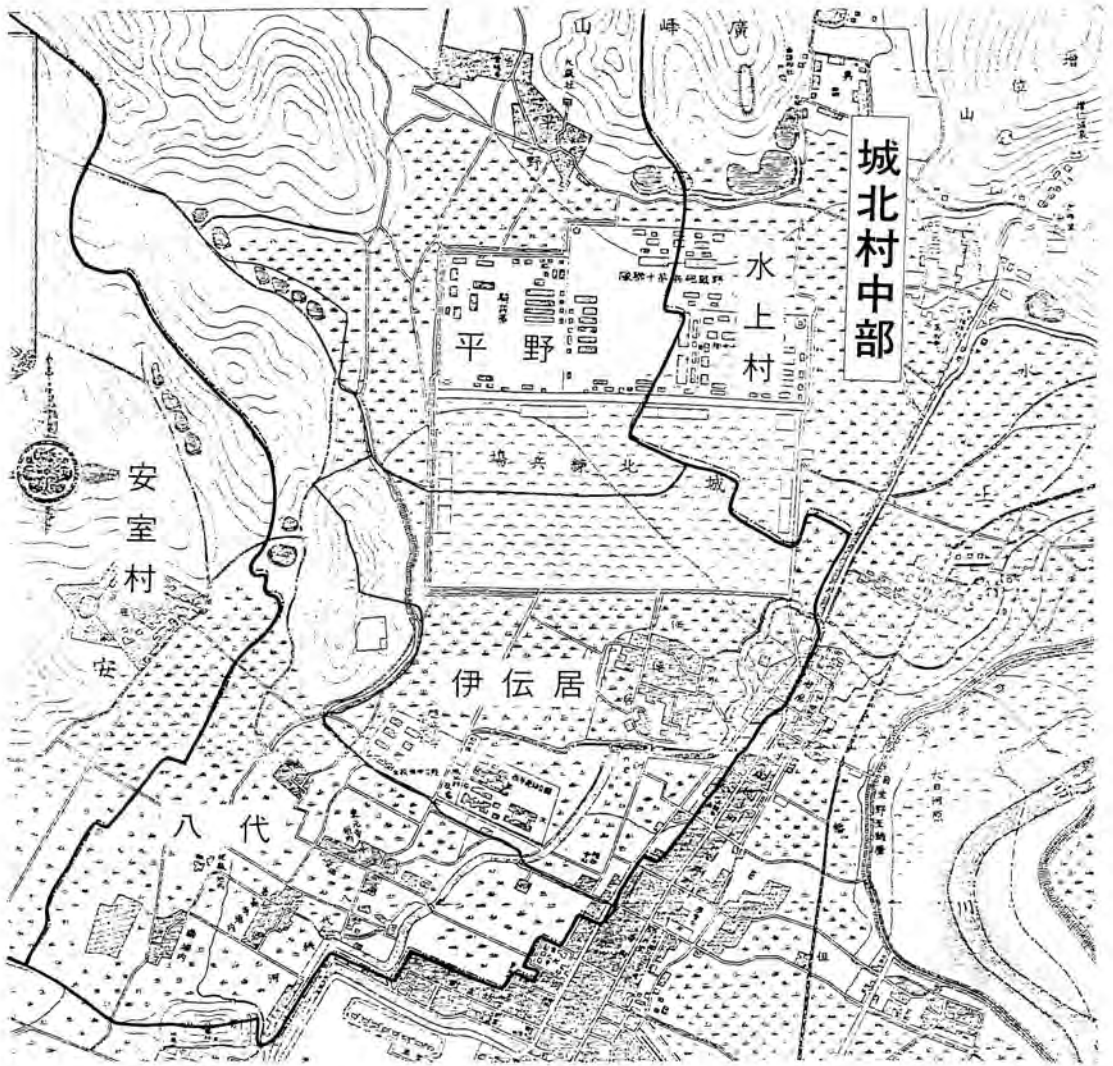
城北村北部



と書くようになりました。この表示はのち兵庫県飾磨郡城北村ノ内八代村〇〇番地と「大字」を言わないことに改正され、さらに大正六年四月一日から兵庫県飾磨郡城北村八代〇〇番地と簡単になりました。

この城北村はひとつのまとまった政治組織です。村長、助役、収入役、村会議員をきめて政治をします。姫路市が市長、助役、収入役、市会議員をきめて市の政治を行うのと同じです。

城北村の範囲は地図で見ると、北は広嶺山から南は景福寺山、岩端町までの広い範囲です。この範囲の子供たちは城北小学校へかようことになりました。広嶺山の上からでも、毎日坂を上り下りして、伊伝居にある学校までかよったのです。城北村の発展やできごとは、次の写真や年表を見てください。



▲「姫路市全図」(部分図)

大正元年十月
姫路市役所 発行



▲姫路市との合併記念碑
八代宮前町 大蔵神社境内にある。
背面に「大正十四年四月一日」

城北村南部

『姫路市街』 大正2.9.22 岡田勝太郎 発行

昭和60年河野孝幸複製より

この図の原図は明治34.3.31第十師団司令部発行のもの。

景福寺山の頂上を城北村と姫路市の境界が走るのが正しい。また鷹匠町との境も訂正した。





城北小学校と城北村役場と姫路師範学校 『ふるさとの思い出写真集』高橋秀吉編
 城北小学校の北西の東光寺山から明治42、3年ごろ写したものようだ。手前の平屋建3棟が小学校、その右の四角い白い二階建てが役場、うしろが師範学校。小学校の北校舎（左）は明治30年、中校舎は38年、南校舎は41年の建築。
 右端に姫路中学校の運動場がわずかに見える。これは絵ハガキで、売店のスタンプがおしてある。



城北村道路元標
 大正十一年八月の内務省令によつて、八代東光寺町北東角に立てられた。みかげ石製。高さ六〇cm。こわれて今はない。(昭三十年 矢内写)

▶旧城北村役場の撤去
手前のワラでかこった屋根形のは
肥壺（ツボケ）



▶その跡に新築された市役所城北出張所。左の道は明治三七年にできた。昭和三三年、西高の運動場をとり入れて広くされる。
（ともに昭三十年 矢内写）



田園風景

（郊外には）肥壺の多いのが目につく。下肥は唯一の肥料で「百姓の息子^{きんこ}は他所^{よそ}で小便するな」ともいわれていたほど。

市街に近いところは下肥取りをし、大切な肥料にしているので、市街に近くなるほどその数は多くなって、一反以上ある田にはほとんど一つずつ壺がついているといつてよい。

（『姫路郷土地理』昭一五

城北尋常小学校 発行

多田初治 藪川惣太郎）

役場の建物

「大正の終わりころ、父は城北村役場に勤めていた。私は

時々ひるの弁当を届けに行った。西側から

石段を三段あがり、二枚になっている戸を

押して入る。観音開きだ。観音開きは手前

に引いて開けるが、ここのは引いても押し

ても開く現代的な二枚戸だ。それを入ると

ガラスの引戸があり、その中はL字形の板

場。L字形のカウンターが目の高さぐらい

あった。その上を金網でめぐらしてある。

金網の中では机にむかつて三、四人が書類を

めくったり字を書いたり、南には大きな窓、

だが外から入ってきた目にはうすぐらい。

タバコの臭いがこもっている。歩くと床板

がガタガタ。

「えらかったなあ」

とほめてもらう。

ある日の夕方、父につれられて役場へ。

事務室の北側には細長い畳の間があって、

二階へ上がるハシゴダンがある。イロリも

からとってきたというフナやナマズを、小
使いさんと焼いて三人で食べた。くさくて
おいしくなかった。

二階は大きな部屋で畳敷だった。

(矢内 澄)

役場の

「私が知っている大正時代

萬吉つつあん

の城北村役場には萬吉つ

あんという小使さんがいました。雑用をひ

とりでこなしていたようです。

私が小学校にあがるまでは、父(矢内市次

郎)の弁当を毎日役場に届けることが日課で、

裏口の戸をあけると、そこにいつも萬吉つ

つつあんがいて、にこやかな顔で手をさしだ

し受け取ってくれました。

萬吉つつあんは村の人気者でしたが孤独

な人のようで、私の家によく来ていました。

事務室の北側の六畳ほどの和室には中ほど

にイロリがきつてあり、天井から自在鉤が

ぶらさがり、うす暗い電灯もさがつていま

したが、ここに寝とまりしていました。東
の物置小屋にカマドとヒチリンがあつて煮

城北村の内の各村の戸数と人口 (明治24年)

陸軍省編『徴発物件一覽表』

	山野井村	八代村	伊伝居村	平野村	大野村	広峰山	合 計
戸数	56	142	84	138	61	41	522
男	161	341	234	328	176	111	1351
女	158	349	230	321	151	110	1319
						人口合計	2670



伊伝居上之町付近 『大正の姫路』高橋秀吉 編
 左の道が昔からの但馬道。この道から左が野里梅ヶ枝町、右が伊伝居上之町。右の道が明治36年にできた道。この道で伊伝居が東にわずか残った。

たきし、夜はイロリの炭をおこして自在じざいかまき鉤かぎに茶ビンをかけていました。
 私が小学校へあがってからも、ときおり行き、学校で習った本を読んでやると、うれしそうな顔をしてフンフンと言いながらマルボシを焼いてくれました。”

(伊藤禄郎氏 富田林市在住)

明治二四年の城北村 (徴発物件一覧表より)

村	人夫	倉庫	寺院	製造所	水車場
山野井	三三二	一〇	三		
八代	九八	四四	二	二	二
伊伝居	七四	二九	一		一
平野	一一五	四三	一		
大野	四七	三五			
広峰	五	五			
計	三七一	一六六	七	二	三

人夫 軍隊の人夫として働ける人数を知るために。

倉庫 軍用品を置くために。

寺院 兵隊が寝泊まりできる所を知るために。

製造所 軍用品を得るために。

水車場 兵隊の食料を得るために。

さあ戦争というとき、軍がすぐ使用できるものを書きあげたもの。日本国中の村々を調べている。これにより城北村の当時のようすがわかる。

明治天皇の崩御

「私が(姫路師範附属小学校)

一年入學の前の年の七月

に明治天皇が崩御され、夜更けまで校庭に
松明を炊いて黙禱したことは子供心にも強
い印象を受け、その日から一ヶ年間喪章を
つけて通學したのも忘れられない。

(自叙伝『八十星』 渡辺孝夫 著)

東京都在住 少年時代伊伝居師範町に在住

明治三六年の城北村

專業農家 一四〇 專業商家 一三 專業工業 一二 雜業 八七
兼業農家 七〇 兼業商家 一二 兼業工業 五 無職 八
衆議院議員の選挙権を有するもの 上族 一二 平民 六〇
直接国稅年十円以上 七二人 その比率 二三・一パーセント
県會議員の選挙権を有する物 六〇人 被選挙権者 一三四人
村会

議員定数 一二人 選挙権を有する者 二二八人

村長 一 助役 一 ともに名譽職

収入役 一 書記 一 ともに六円以上

区長 六 区長代理 六 常設委員 六

『兵庫県飾磨郡勢一班』明三六編

明治四三年の城北村

生産物価格

農産物 八一五八〇円 畜産物 三五一二円 林産物 五一〇円

水産物 〇 工産物 六三八五〇円 計 一四九四五三円

米 三二七五石 麦 一九九三石 マユ 〇

産業一班 織物 果樹園 とうめん 製麦粉

明治前期(1—21)年表

明治	<南八代村のできごと>	<北八代村のできごと>
1 (1868)	(9.8明治元年となる)	男30 女37 庄屋 長右衛門
2		男30 女40 庄屋 長十郎
3	庄屋 赤鹿八朗	男32 女43
4		庄屋 矢内長十郎
5	(庄屋を廃し戸長を置く)	
6	白川学校できる(8年説あり)。	
7	大歳神社が村社となる。官有林の払い下げを申請する。	
10	保長 田中五平	
8	戸長役場を東光寺に置く。 二等戸長 池内仙次郎 一等戸長 兎島八尋	
9	大歳神社の井戸枠を寄進 氏子151戸 631人	
10	白川学校を白川小学校と改称。	
11	戸長 池内仙次郎	
12		
13	兵庫県立姫路紡績所ができる。	
14	戸数138 人口609	戸数12 人口73
15	赤鹿八朗 県会議員になる。	(この頃南北八代村が合併)

<八代村のできごと>

<社会のできごと>

16	7.1 八代組戸長役場を東光寺に置く。 このころ八代村字限図を作る。	
17	7 戸長 池田万次郎 8 姫路紡績所休業。 10.1 八代村外五ヶ村戸長役場と改称。	6 か村で559戸 2854人
18	6 狭河に石の道標を立てる。 12 姫路紡績所を払い下げる。	
19	大歳神社の井戸屋形を建てる(18ともいう)。	
20		伝世尋常小学校と伊伝居簡易学校を 伊伝居馬場先に設ける。
21	4 戸長 松尾虎次 姫路紡績株式会社となる。 8 播陽時計会社ができる。	6 か村で540戸 男1352 女1306

〈城北村のできごと〉

- 22 4.1 城北村誕生（土地の表示は兵庫県飾東郡城北村ノ内大字何何村字何何
○番地とする） 役場を八代東光寺に置く
5 村長 大谷長太郎 人口2651
- 23
- 24 5 平野村 柳内儀三郎宅を借り、巡査駐在所を置く（常称寺の東 今は道 柳内志良氏談）
8 伊伝居簡易学校を廃し伝世尋常小学校に併合（伊伝居馬場先に）
12.28 伝世尋常小学校を廃し城北、水上小学校に分ける
このころ金山銅坑の試掘をする 人口2670
- 25 1.8 城北小学校開校式
- 26
- 27 男山山頂で箱式石棺を発掘 人口2855
- 28 今の少年刑務所の工事開始
- 29 第十師団特科隊の工事開始 平野の長者屋敷を発掘
- 30 4 村長 中村清三郎
9 城北小学校を今の城北幼稚園の場所に新築移転
- 31 監獄（今の姫路少年刑務所）今宿村から現在地に新築移転
- 32 姫路糧秣合資会社（資本金3万円）伊伝居村にあり（設立年不明） 人口2783
- 33 (1900)
- 34 姫路師範学校が（今の工業高校の場所に）開校
- 35
- 36 師範付属小学校校舎竣工 城北村役場を伊伝居に新築 戸数550 人口2935
11.16 明治天皇 城北練兵場での観兵式へ
- 37 人口2973
- 38 戸数585 男1538 女1515 人口3053
- 39 このころ城北村立城北尋常小学校と称していた 人口3189
- 40 4 城北村立城北尋常小学校に高等科をおく 人口3259
- 41 人口3206
- 42 戸数612 男1621 女1578 人口3199
- 43 戸数611 人口3175
- 44 4 村長 小松原軍三郎
- 45

明治中・後期(22—45)年表

明治	〈八代のできごと〉	〈社会のできごと〉
22 (1889)	城北村ノ内大字八代村の表示になる	市制、町村制施行 姫路付近大水 4 姫路市や城北村が誕生
23	播陽時計製造会社が閉鎖	5.17 郡制公布
24	八代村の戸数142 男341 女349 水車場2 製造所2 9 平野巡查駐在所を平野から今の東光寺町 町1-1へ移す	
25		
26		
27	3 八代村総代 池内仙次郎 城北村ノ内八代村と表示を変える	日清戦争
28		
29		9 飾東・飾西両郡を合わせ飾磨郡とする
30		
31		6.1 電燈が姫路にはじめてつく
32	11.7 姫路紡績焼ける	
33 (1900)		
34		
35	八代村区長 池内仙次郎 大歳神社々掌 柴山訥事	このころから部落の区長を人民総代とも言 った
36	新道(野里街道)完成	
37	城北55号線(西高の東)できる	日露戦争
38		
39		
40		
41	牛尾庄吉が乗合自動車を姫路駅前—野里軍 人橋に走らせる 9 狭河637番地の水車が西村水車となる	
42	姫路中学校が京口から移転 大歳神社の改築を藤本萬吉が請け負う	
43	大歳神社の手洗石を新調	
44	下段の玉垣をつくる。大歳神社竣工。 旧南北八代大歳神社を合祀	ガス会社が姫路にできる
45 (1912)		7.30 大正元年となる